

が、その侯爵夫人のところまでドイツ全權大使フォン・コイデル男爵と知り合ひになつた。そして彼は間もなく男爵の中に偽りなき友人を見出したばかりでなく、繊細な感覚を持つた音楽家をも認めるやうになつた。

ファウスト交響樂を演奏したこの年のハルレに於ける音楽家總會には、リストは珍しくも出席しなかつた。勿論彼はシンシナティからの招待にも拒絶の返事をしなければならなかつた。

一八七五年二月の半ば、リストは再びベストに着いた。音楽學校は金銭上の種々の困難のために今尙實現されてゐなかつた。そこでリストは、文化大臣トレフォルトに宛てた長い文書を作つて、その中で「主なる考へを披瀝して、文化大臣を設立さるべき音楽學校のことをまざ／＼と想ひ出させた」。彼は既に設立されてゐる施設、即ち國立音樂院とか演劇學校とかを新しい施設と合併するといふことを望んでゐるのではない。之等は従前通り存続すべきである。

豫算では毎年二萬五千グルデンが「音楽學校に割當てられ、その中から一萬三千グルデンは演劇學校のものになるといふわけである。かうすれば、ほんの少しの學科、特にその教授の結果が、生々と、豊かに、この國の全音樂生活の上に作用するやうな學科を行ふことに限つても、優秀なる成果が收め得られるのである」。このために、彼は理論の比較的高級なものを教授し、更に無伴奏教會合唱曲の比較的高級なる訓練とか、ハンガリア音樂の特性を講義するとか、そして最後にピアノの最高級の授業を課するやうな案を考へたのである。その他の樂器の授業は國立音樂院で行はれることになつてゐる。教員として、彼は先づ第一に二人、即ち音樂の校長として、ハンス・フォン・ビューローを、ハンガリア教會音樂の再建者として、チェチリア協會長ウィット博士を推薦した。リストは開校の期日を一八七六年の晩秋にし度いものと思ひ、そしてそれまでに集まつた金は、第一の計畫と設備（圖書等）の調達に向けられることになつてゐた。この提案は大體に於て實現せられた。

リストは、この年にも慈善の目的を以てベストで繰返し演奏して聞かせた。最も注目すべきものは、三月十日にバイロイトのためにワーグナー自身によつて指揮せられた演奏會に於ける共演であつた。リストはベートーヴェンの變ホ長調協奏曲を弾いた。「大儀さうに、非常に老衰して、屈み勝ちに、彼はピアノに歩み寄つた。恰も彼がピアノの鍵盤に觸れるや否や、而も魔術によつて非常に豊富な音量が響き渡り、ベートーヴェンの主題の像が非常な力を以て、或は弱く或は力強く浮び上つて來た。恐らく彼の青年時代に於ては、かくも比べものなきまでに表現することが出来なかつたであらうに。」その上にプログラムには、尚リストの最も新しい作品、即ちストラスブルグの鐘といふカンタータやワーグナーの指揮による「指環」の斷片が入つてゐた。セント・ガレンの音樂祭以外には、二人の友人が一緒で公けに藝術活動をしたことは、これが唯一回であつた。

ワイマールへの歸途、リストは一八七五年四月半ばに、二三日ミュンヘンに滞在した。そして、それは新設された小作農合唱協會によるオラトリオ・キリストの演奏に出席するためであつた。その作品は非常な成果を收めたので、皇帝は即座に宮廷劇團に援助させ、宮廷劇場で第二回の演奏を行ふやうに命じた。リストは當時ハンノーヴァーの宮廷劇場の總監督をしてゐたブロンズアルトの招待に應じて、ハンノーヴァーに於ける聖エリザベートの演奏に出席し、そしてアイゼナハのバハ記念碑のためにインゲボルグ・フォン・ブロンズアルト夫人と共に、演奏會を開き、二千ターレルの収入があつたが、そのハンノーヴァーを通つて、彼はネーデルランド王の客となつて、ローの宮殿に赴いた。そして王は、その國の藝術家達をどし／＼援助し、勵ましてゐたのである。最も素質のある人々は、「王の給費生」として勉強し、そして有名な専門家の中から王に選ばれた審査員によつて毎年審査して貰つてゐた。後年に於ては屢々さうなつたのであるが、この年に初めてリストもこの審査員に加はり、殊の他、王の共感を得た。リストは夏の間、バイ

ロイトで舞臺稽古のために二週間滞在した他は主にワイマールで過した。少し前に死んだ彼の後援者であり、そしてビューローが云つてゐるやうに、「最も高潔なる、最も聰明なる、最も教養の廣い婦人の一人」たる、フォン・モウクハノフ夫人を追想して、リストはワイマールの聖堂騎士館で追悼祭を行つた。そして、そこで「彼女の想ひ出に捧げられた」エレジー（哀歌）も初演されたのである。尙その他に、一度彼はこの夏ワイマールで公衆の前へ出た。而もそれはドイツ皇帝兩陛下臨御の下に行はれたカール・アウグストの記念碑除幕式の時であつた。リストは、この祭典のために或る「簡単な、大衆受けのする合唱曲を書いたが、その歌詞はダヴィッド王から得たものであつた。即ち、主は聖なる者の心を護り給ふ云々……」。

それからリストは、九月の半ばから冬の間中ローマへ行つてゐたが、「スタニスラウス」の作曲は少しも進まなかつた。侯爵夫人はそれに就いて、アデルハイド・フォン・ショルンに手紙を書いてこんなことをこぼしてゐる。「リストは屢々街で晝食や晚餐を採ります。……ほんとに屢々……テイポリへは歸りません。……楽しい社交的な遊びをします。かうして、彼の時間を浪費してゐるのです。彼は決して創造力を失つてゐるのではありません。だのに仕事の楽しさは失つてしまひました。これが、この最近の悲しい五年間の哀れな結果なのです……」。

とかくしてゐる中に、国立音楽學校がベストで開校された。リストはその時にはベストにゐなかつた。教員の選擇に關する彼の願ひは充され得なかつた。ウィット博士は實は承諾したのだつたが、その健康状態のために移つて來ることが出来なくなつた。そしてリストが最大の希望を以て協力して行かうと思つてゐたビューローは拒絶した。ビューローは、この時彼の音楽の方向に於て大轉換を始めた。即ち彼は、後になつては間々、以前には最高のものであつたやうな、凡てのものを實に猛烈に呪詛するものと變つて行つた。或る段階にあることを布告しつゝ、段々とリスト

の作品と關係を絶ち始めた。否、リストの作品を忌避し始めたのである。このビューローの態度に關して、内面的信念がどれだけの價值があるか、人間的、個人的根據にどれだけの價值があるかといふことは、實に少しも明らかでない。だのに、一方リストの態度は依然として變つてゐない。そこで自分の最も親しい人の、此の「親友」も亦リストを悲しませなければならなかつたし、そして又、ビューローのブラムス宣傳は、リストの作品の進出を著しく邪魔し、リストさへも、彼のその時以來「彼のハンス」の方へ歩み寄ることは出来なかつた。リストは始終ビューローを愛し、個人的な交際は常に心からのものであつた。ビューローも當然その一人であつたのだが、そのやうな種の人々にとつては、リストは侵すべからざるものであつた。そして何物もこの不動の態度に接しては、彼を迷はすことは出来なかつた。彼等の言動がまた屢々理解し難いものであつた時も、リストはそれらを一生涯の間、高く、而も嚴肅なる態度で受取つたのである。「ビューローは重病人です。彼を標準としてはいけません。」とか、「不幸なる人は、その大きな惱みのために堪へることが出来なくなつてゐます。」……かういふ風にはビューローが攻撃せられるのを辯護しようとした。

ビューローの拒絶のために国立音楽學校の校長にはフランツ・エルケルがなり、そして作曲理論の教授としてはローベルト・フォルクマンが任命され、秘書はアブラニーであつた。リストは「名手と教師を目的とする」ピアノのクラスの指導を受け持つた。彼は週に四回、三時から六時まで授業を行つた。彼は毎年々々非常に良心的にこの義務に従つて行つたが、彼のために定められた報酬は實に些細なものだつたので、結果は少しも面白くなかつた。實にリストの音楽活動一般のやうに、非常な期待の中に蘇生せしめられた企畫は、彼の努力に對する一般の人の無關心さによつてだん／＼と水泡に歸した。かくしてリストは、ベストでの活動については少しの喜びも味はなかつた。そして後年

になつて屢々憤激して、「ベストは音楽の砂洲です。」と云つた。然しながら、彼はどこまでも約束を守つて来たのだつた。そして老齡のために、冬の長旅は苦痛であつたのだが、その澤山の負擔があるにも拘はらず、一旦引受けた地位に辛抱し續けたのであつた。

リストが一八七六年二月半ば、ベストに着いた時、彼は都市教區の近くのフィッシュ・プラッツにある家の小さな二つの部屋に引越した。そしてその家では暫定的に音楽學校が開かれた。リストが到着してから二三日間、ベストは恐ろしい洪水に脅やかされた。ドナウ川は岸から溢れ出て、その地方一帯に氾濫して居つた。一八三八年の時と同様に、今度もリストは直ちに彼一流のやり方によつて、窮乏の救済に貢獻しようといふ氣になつた。彼は氾濫に苦しむ人々のために演奏會を開いて八千グルデンを収めた。それからリストは、四月の半ばウィーンを通つてデッセルドルフへ赴き、そこでは彼の以前の弟子であつたラツツェンベルグが二回のリスト演奏會（グランのミサ曲、プロメトイス）を催した。五月十六日には彼はファウスト交響樂のために、ハンノーヴァーのブロンスアルトの所に滞つた。そして其處でバイロイトの奨學資金を得るために演奏會を開いて、五千マルク以上を収めた。五月の後半はリストは再びローの宮殿で、榮譽審査の審査員としてネーデルランド王の客となつた。そして前以てアルテンブルグで行はれた音樂家總會に参加した後、彼は六月の初め早々、ワイマールに行つた。そこには宮廷の人々や多くの弟子達が久しい間待ち焦れてゐたのである。だが彼は八月の月をバイロイトで過すために、八月一日にはもう宮廷庭園を去つて行つた。

此處では實に辛苦をなめた鬪争の擧句、遂にリストが云つてゐるやうな「ドイツ藝術の偉大なる奇蹟」が明るみに出され、第一回演劇祝典上演は全世界に向つてワグナーの努力の勝利を布告したのであつた。リストはワーンフリードに居を構へ、そしてニーベルンゲンの指環の三回に亘る連續上演には皆出席した。この作品を初めてワイマール

で上演してやらうといふ彼の以前の鬪争心は、又しても生々と彼の眼前に浮んで来た。そして彼は咎めるやうな態度で、次のやうに大公に報告文を書いてゐる。「こゝで現に行はれてゐるものは、殆ど一つの驚異です。私はワイマールが、その賞讃すべき經歷よりすれば、當然自分のものとならなければならぬやうな人に、少しも關心を持たないといふことを常々残念に思つてゐます。」祝典劇の第一回連續上演は、劇場の食堂に於ける大宴會を以て終つた。そして凡そ七百人の人々がそれに參加した。ワグナーはリストに、次のやうな乾杯の辭を述べた。「未だ誰も私のことを知らなかつた時に、先づ第一に、私に信頼を置いてくれた人がこゝにゐるのです。そして彼がゐなかつたら、恐らくあなたがたは、私の樂譜を今少しも聞くことが出来なかつたでせう。私の愛する友——フランツ・リストこそ、その人なのです。」深く心を動かされて、殆ど口もきけない程になつて、リストは答へた。「私の友の榮譽に餘る稱讃に與かり感謝致します。そして私は彼に對して、最も大きな畏敬の念を持ち續けてゐます。——最も恭しく、丁度私達がダンテやミケランジェロやシェークスピアやベーターヴェンの天才の前に頭を下げると同じやうに、私はこの巨匠の天才の前に頭を下げるのです。」

實にワグナー事件のこの成功と共に、非常に立派な態度を持つて来た彼の以前の大膽な仲間の希望は實現されたのであつた。これに反して侯爵夫人は、リストがバイロイトに關與することを鋭く非難したやうである。否、その不機嫌さは非常に激しいものであり、そのためリストは、この年にはローマへ行くことを斷念した程であつた。これに對して彼はバイロイトの祝典の日の間、非常に惱まねばならなかつた今一人の人、ビュローをどうしても訪問しないわけには行かなかつた。「再び會ふことが私には必要なことでした。そして私は、その再會を延期してはならないのです。且つ彼をゴーデスベルグに居られないやうにしてはならないぞと、自分を非難しました。あゝ、それなのに色

色な義務といふものは、この世では相對立してゐるのです。これこそ最も苛酷な葛藤です。人々は、自分が最も愛する人々にさへも、手助けすることが出来ないことに安んじなければならぬ、といふやうに生涯は作り上げられてゐるのです。」ビューローはその時、演奏旅行のための興奮と、極度の疲勞のために、すっかり疲れ果てて、ゴースベルグの病院にゐたのである。彼は相續いて起る軽い脳卒中のために完全に倒れてしまつてゐた。唯、非常に緩慢にはあるが、快方へは向つてゐた。ブロンズアルトは快復期にある彼のために、自分の家を提供した。リストは九月に、此處へやつて来て二週間滞在した。ビューローは、そのことについて報じてゐる。「彼は今尙、凡ての驚くべき魔法使ひのやうです。私が期待してゐたよりも、精神的、肉體的に強健です。然し私は、彼のプロトイスの動きに従つて行くことは出来ません。彼は私にとつては正に怖ろしい者です。——私は彼に對して、どこからどこまでも相容れないもののやうに感じます。」ハンノーヴァーから、リストは直接ローマに歸つて來た。それは冬中、音樂學校で彼の仕事をするためであつた。

一八七七年三月十八日に、リストは今一回ウィーンで公けに演奏して聞かせた。彼はウィーンのベートーヴェン記念碑のために、ベートーヴェンの變ホ調協奏曲と合唱幻想曲を演奏した。かうして、ボンの巨匠のこの榮譽ある記念碑も、その成立は一部分リストに負ふものである。バイロイトを訪れた後、リストは四月の初めに再び宮廷庭園に行つた。夏の主なる出來事は、ハンノーヴァーの音樂家總會（一八七七年五月十九日より二十四日まで）であつた。リストはこゝで久し振りに、再び初めて自分自身で、而もベルリオツの幻想交響曲と彼のダンテ交響樂とを指揮した。その上に、彼は第四回目の演奏會の日には四回、初めにはブロンズアルト夫人と一緒にサンサーンスの變奏曲と、彼のホ短調悲愴協奏曲を弾き、次には一人で彼の「愛の讚歌」とハンガリアの旋律とを弾いた。マリアンヌ・ブランツ

は、彼の伴奏で聖チェチリアを唱つた。この祝典の初めに、劇場でコルネリウスのバグダッドの理髮師が、初めてリストの樂器編成による新しい序曲をつけて上演された。結果はこゝでも殆ど活力のない歌詞のために、實に不十分なものであつた。ポット樂長の指揮による聖エリザベートの、残念ながら餘り香しくない演奏が、ハンノーヴァーのリスト記念日の最後となつた。そしてポットは、ビューローが報じてゐるやうに、「半分酔つぱらつてゐる様子で、エリザベートにだら／＼と三時間と十五分の長い間、指揮棒を振り廻し、かうして彼は平衡状態（臺と一緒に）を失つて、空いてゐた一等の土間席に落ちてしまつた。有名な諺の如く、少しも怪我せずに反つて驚いて眼が覺め、巨匠リストから怒られるやうな指揮ぶりを、それでも續けて行かうとした。」リストはそれから自分で、この曲の終りまで全部指揮した。

リストは八月の半ばには再びローマに到着し、永い間手をつけなかつた——彼は諦めて *Je déhors mange le dehors* と云つた。——自分の仕事に再び着手しようとしてデステの別荘へ赴いた。そして今度の滞在には、澤山の喜ばしい收穫があつた。「デステ別荘の絲杉に寄せて」や後年「巡禮の曆」の第三卷に集められたその他の數々の小品や第二エレジー（リナ・ラマンのために）と、合唱、獨唱、管絃樂のための「ヴィア・クルツィス」といふ第十四番目の十字架の札所の一部はこの時に完成された。侯爵夫人は満足しながらこのことに關してアデルハイド・フォン・シヨルンに書き送つてゐる。「リストはベストへ向けて旅立ちました。彼の健康は非常に氣がかりです。彼の地の氣候は寒いのです。——彼の放浪生活は、あのやうな年齢になつては駄目です。彼は自分の力をすっかり消耗してゐます。——消化器は非常に弱つてゐます。——彼の健康状態は非常に危険です。——毎晩のやうに彼は幾らかの熱を出します。私は醫者を呼びにやつたのですが、彼は醫者の方を向いて嘔ひましたので、何か手當をするのはほんとに困難でした。」

體質は丈夫なのですが、年齢は七十に近いのです、だが私は大きな高貴なる喜びを持つて來ました。——ドイツでは死滅したかに思はれた彼の天才は、イタリアで再び甦つてゐます。彼が貴方のために作曲した歌曲（「静かなれ」）は一連の素晴らしい作曲の最初のものでした。そして非常に高潔な崇高な感情を有つたものでした。彼は澄み切つた碧色の中に漂はうとして、此の世の最高の榮位を見捨てゝゐたのですが、今に至つても、彼がこのやうにして作曲したものは一つもなかつたと、人々は思つてもよいでせう。」

一八七八年の夏は、リストにとつて實に多事多端であつた。復活祭の週間に、彼はウィーンに滞在し、そして一八六七年以來この總監督を務め、リストと再び親密な交際を行ふやうになつたデインゲルシュテットと共に、コルネリウスの死後ずつとその儘放置されてゐたスタニスラウスのための歌詞の改作を屢々協議した。デインゲルシュテットは、この計畫をとり上げ、そして直ぐそれを改作することを約束した。バイロイトにほんの一寸滞在した後、それからリストはワイマールへ行つた。五月の終りに、こゝからハンノーヴァーの「兩ハンス」を三日間に亘つて訪れた。ビューローはブロンズアルトの勧めに従つて、昨年来ハンノーヴァーの宮廷樂長の地位に就いてゐた。二人の友人の有利な協同は、然しながら屢々ビューローをして、劇場の勢力との論争で混亂せしめ、その場合に、劇場の長としてブロンズアルトは、彼に權利を與へることが出来なかつたやうなビューローの病的な癪癢のために、暗いものとなつて行つた。リストは屢々こゝで和解させようとして干渉し、旨くは行つたが、永い間に事態は又うまく行かなくなつてしまつた。彼が今度訪れた時、ビューローはワーグナーのリエンツィを指揮したのである。皮肉たつぷりでビューローはこのことを母に報じてゐる。「三十四年或は三十三年以上前の今日、私はリエンツィの上演の後に、ロラ・モンテツツの紹介で、ドゥ・サクス・ホテルでリストの知遇を得たのでした。今日、第一の婿（ビューロー）はローマ、ベスト、ワ

イマールの魔術師の前で、彼の第二の婿（ワーグナー）の同じ處女作をハンノーヴァーで指揮してみました。……そしてその上演は、ピストルから發射されたやうに堂々と酔はすやうに進んで行きました。この時、如何に澤山の像、觀念、想ひ出、感覺や思想が私を動かしたかといふことを、貴女に云ふ必要がありませんか。さうです、貴女は確かに私のした通りを考へ、感じて見ることが出来ます。それで満足です。……私は少しも天を怨んだり、世間を呪つたりしません。——私はそんなものからは、超越してゐるのです。」

ワイマールへ歸つて來ると直ぐ、リストはどうしてもベストの國家的使命によつて、パリへの長旅を企てねばならなかつた。彼はパリ萬國博覽會の審査員として、ハンガリアを代表することになつた。「私は一度でも『下らぬ愛國主義』を驅り立てることなく、ハンガリアのために何か役に立つことが出来る時には、極く僅かな報酬に甘んじて喜んで力一杯に働きます。」と、彼はエドアルドに書き送つてゐる。リストは一八六六年以來、一度も行かなかつたパリでは、彼が子供の時既に友人關係を結んでゐたエテールの家に住んだ。そして彼の以前の友人の二、三人、特にヴィクトル・ユーゴーを訪れた。彼は尙エルフルトの音樂家總會には間違ひなく行かねばならなかつたので、歸路は急いで行つた。こゝでビューローは、リストの指揮でブロンズアルトのピアノ協奏曲を演奏し、それに續いてリストの作のレナウのファウストのための二つの物語りが、エルドマンステルフェルによつて演奏され、そして最後に、再びリスト自身の指揮によつて、彼のハンガリア交響樂が演奏された。ブロンズアルトとビューローは、それから巨匠に従つて二、三日ワイマールへ行つた。こゝでは大公の二十五周年行政記念祭の祝典が始まつてゐた。無數の王侯達か、ここに居合せた。特に公園では朝の演奏會が催され、ワイマールの樂長は、そこで夫々自分の作品を指揮した。リストもそれに參加し、カール・アレキサンダーに捧げられた祝典行進曲を指揮した。彼は今一度バイロイトで一週間を

過してから、九月の半ばになつて、遂にデステの別荘で、非常な負擔となつた旅行の休養と安靜と落着きを味はふことが出来た。「ヴィア・クルツイス」は今完成されて、新しい作品、獨唱と合唱とオルガンのための歌曲「セプテム・サクラメンタ」が始められた。

リストが再びベストへ行つた後、間もなく彼の最も深く愛してゐた従兄のエドアルドが死去したといふ知らせを受け取つた。葬式には病氣のために出席することが出来なかつた。だが然し、彼がその次にウィーンに滞在するに當つては先づ第一にエドアルドの未亡人と一緒に墓を訪れたのであつた。リストは四月の第一週はウィーンに滞在した。ここではオーストリア皇帝兩陛下の銀婚式の前祝ひのために、音楽愛好家協會主催の演奏會で、彼の指揮によつて戴冠式ミサ曲とオラトリオ・キリストからの拔萃と共に、グランのミサ曲が演奏された。このミサ曲は、完全な成功を収めた。「昨晩はグランのミサ曲が、初めて完全無缺な姿を以て光を放ちました」と、彼は侯爵夫人に述べた。リヒアルト・ワーグナー協會はベーゼンドルフ會館に於ける夜會を催して、彼のウィーン滞在に敬意を表した。管絃樂を指揮したのは、こゝでリストと間もなく心を許すまでになつた程の交際を始めたフェリックス・モツトルであつた。そして、モツトルは次の年には屢々ワイマールに滞在し、リスト音樂の忠實なる闘士となつたのである。彼の處女歌劇アグネス・ベルナウエルも、リストの推薦によつてワイマールで(而も成果を収めた)上演せられたのであつた。リストはワーグナー協會の夜會で自分に示された敬意の返禮として、最後に自らグランドピアノに坐り、ショパンのノクターンによる香り豊かな即興演奏を行つて、來會者を魅了してしまつたのである。十二時過ぎに、その素晴らしい祝宴は終つた。

旅行の途中彼は、クニーゼの指揮の下にリュールの合唱協會によつて、フランクフルト・アム・マインで行はれたオ

ラトリオ・キリストの成功を収めた演奏に出席し、一八七九年四月の終りにワイマールに着いた。こゝには既に澤山の弟子達が待ち構へてゐた。「二箇月この方、彼の園りを跳び廻つて來た三十匹(どんなに少く見積つても)のピアノの蚊があるにも拘はらず、彼は實に若々しく生々とした見えた。」と、ビューローは宮庭庭園を訪れた時に冗談を云つた。何處までもリストの後を追はうとするピアニストの數は、毎年々々と増して來た。實に五十人の藝術に熱中した人々を擧げることが出来る。カール・ポリッヒ、ベルトランド・ロート、エドアルド・ロイス、ハインリッヒ・ルツテル、アルフレッド・ライゼナウアー、アルトゥール・フリードハイム、オーエの貴族の婦人リナ・シュマールハウゼンとリナ・ティマノフ。六月三日に、リストは音樂家總會のためにウィースバーデンへ旅行した。そしてビューローが指揮したその音樂家總會のプログラムの中には、ブロンズアルトの春の幻想曲とリストのファウスト交響樂が抜き出てゐた。ビューローはまたピアニストとして、チャイコフスキーの協奏曲を弾いて聞かせ、そして彼の弟子マックス・シュワルツは五つのリストの協奏練習曲を弾いた。リストはそれに非常に満足し、その若い藝術家をワイマールに招待し、そこで夏の間に彼と一緒に勉強した。一寸した挿話を此處で語つて置かう。即ちウィースバーデンでリストは、偶々フランツ・アプトと同じホテルに泊り合せたのである。或る日、アプトが彼を訪れようと思つた時、リストは丁度或るセレナーデを作つたところであつた。リストは彼を伴つてバルコニーに出た。「珍しい邂逅です。二つのフランツと二つのアプトとは」と、彼は笑ひながら云つた。

(譯者註)、リストもアプトも名前はフランツであり、又リストは僧侶の位を持つてゐたので、二つのアプトと云つたのである。

リストはウィースバーデンから宮庭庭園に歸つて來て、この年の夏中そこに滞在した。一八七九年九月の初めに、

彼は再びローマに現れた。彼は大抵デステの別荘で過したので、ローマではボッカ・デ・レオーネ街にある、唯二つの家具付きの部屋を持つてゐただけだった。食事は侯爵夫人が調べてくれた。弟子達の中では、ライゼナウアー、ヨーゼフ・ギルレ、ドラ・ペーテルゼン、リナ・シュマールハウゼンが彼に従つて来てゐた。リストがティヴォリにゐた時には、弟子達は毎週二回カムパニヤを通つて、彼の所へ来て何時も食事の客となつた。この年の秋には、リストは尙教會の名譽章を與へられた。ホーエンローエ大僧正が統率してゐたアルバーノ僧會は、彼に僧會員の稱號を以て呼ぶといふ位階を賜はり、彼は僧會々員職の權利を得た。

山嶽地方では、この冬非常な飢饉が猛威を振つてゐた。そこでホーエンローエ大僧正とリストは、デステの別荘で慈善演奏會を催すことに決めた。ローマの上流の人々は皆、このためにティヴォリに馳せつけて来た。アルフレッド・ライゼナウアーは、この演奏會で初めて公衆の前に現れ、リストのタランテラを弾いて物凄い成果を収めた。最後にリストは自分で演奏した。この機會の外、この冬リストは殆ど人前に出なかつた。彼は黙々として仕事をした。侯爵夫人に捧げられたミサ、プロ・オルガノ（オルガンのためのミサ曲）や、第二のメフィストワルツやヘンデルのアルミーナ等の編曲は、その時出来上つたものである。彼はこゝでも又通信物から見ると、「彼の生活の責苦」から全く解放されてはゐなかつたが、毎日送られる本や樂譜や請願書やそれに類するものの數は、もはやワイマールに於ける程の多きに達しなかつた。珍しいことには、彼に意見を求めて来た原稿の閲覽を、次のやうに斷つてゐるのである。「拜啓、作曲を『評價すること』は私の仕事ではありません。そのためには、既に餘りにも多くの人々が居ります。私はその作について愉快若しくは不愉快——多くの場合兩者は混然としてゐます——を感じるだけで満足してゐます。貴下の述べられた獻呈の辭は喜んでお受けします。敬具、フランツ・リスト。」

一八八〇年一月半ば、リストは再び責任を果すためにベストへ行つた。この年の冬には、まだ國立音樂學校の新校舎の中に、彼の家が作られてなかつたので、彼はホテル・ハンガリアに泊つた。こゝで思ひがけなく、リストはヨアヒムと再會したのであつた。ヨアヒムはベストで演奏會を行ひ、同じホテルに泊つてゐたのである。リストは非常に喜んで彼を迎へ、彼の演奏會の稽古の伴奏をしてやり、そこで演奏されたヨアヒムのヴァイオリンと管絃樂のための變奏曲を繰返し稱讚した。「それは貴方が、私のものを好んでゐないやうな時でも、私は尙更貴方のものを高く買つてゐます。そして私はいつても、貴方と一層近しくなる機會があると喜んでゐるのですから。」リストがヨアヒムにして慣々しい「君」といふ言葉を、もう使はなかつたといふことは、曾ての交際と今の交際との間の相違を仄かに示すものである。

リストのウィーン滞在を機として、復活祭の前の週間には大リスト演奏會が準備されてあつた。彼は自分で音樂愛好家の演奏會を指揮して、男聲のためのミサ曲、理想、ストラスブルグの鐘を演奏した。又もや批評は、その夕べの大成功を減茶々々にしてしまつた。人々がどれ程の敵意を持つてゐたかといふことは、次のやうな全く異口同音に行はれた新聞批評がこれを示してゐる。「吾人は兎に角、今度もリストを見るために來たに過ぎなかつた。そして彼の作品を聴かねばならぬための料金を拂つたものとしては、その満足は、餘りにも無價値な買物である。ミサ曲の演奏の外面的な成果は、次のやうなことに覆ひ隠さるべきであつた。即ちこの世界的名聲ある達人たる年老いた作者は、彼自身に相應しいほどの拍手喝采を誘發せんがために、指揮者として、独自の畏敬すべき姿を表したのであつた。而も、その間に於てミサ曲は、違ふ環境に置かれたならば、簡單に一笑に附されるかの如きものであつた。そして、さう云つたミサ曲の演奏は美しいものではなかつたが、然し決して、その作品の水準下にあるやうなものではなかつ

た。」それに續いて尙、ワーグナー協會のリストの夜會や、二三のヘルメスベルゲルの指揮による教會演奏會が行はれた。

彼が再び夏を過したワイマールから、リストはバーデン・バーデンの音樂家總會（五月十九日より二十四日まで）に行つた。そしてワイマールに二週間前から滞在してゐるリストの多くの弟子達の間、不安と動搖を惹き起して居つたビュローを、リーベンシュタインの温泉場に訪れてから、八月の半ばには、もうイタリアへの旅に立つた。リストは一八八〇年からは、ローマに滞在した時には、いつもバブイーノ街に面した、餘り遠くないアリベルト・ホテルの狭い二つの部屋に泊つた。弟子達も大部分はそこに泊つた。巨匠は毎朝、四時頃には起きて、仕事の後ミサに出かけるために、七時頃まで仕事をした。朝食の後は暫らく休み、それから訪問をしたり、訪問を受けたり、或は侯爵夫人が調べてくれた午餐まで仕事をした。何時も四時までは机に向ひ、四時から六時までは教授をし、それからお氣に入りの弟子達とカルタ遊びをした。そして八時頃にはいつも夕食をとり侯爵夫人の所へ出かけた。九時頃になると床につくのが常であつた。侯爵夫人は、當時既に全く引籠つて生活してゐた。彼女は決して家から出るやうなことはなく、而も完全に外氣を遮断して、家に閉ぢ籠つてゐた。光線はちつとも彼女の仕事部屋に入らなかつた。彼女は實に、日中にラムプの光だけで仕事をしてゐたのである。——その上、食事や一寸した念入りのお化粧さへも全く忘れてゐた。「彼女は網の中にある蜘蛛のやうに、大きなサロンの眞中に坐つてゐた。その中には立派なベヒシュタインもあつたのであるが、客間には家具がギッシリと詰つてゐて、彼女のところまで通つて行くことが出来ない程であつた」と、この多旅行の途中彼女を訪れたロルフスは報じてゐる。リストは侯爵夫人のところへ來た時には、どの訪問者もするやうに、入つて行く前に新鮮な空氣を少しも持つて入らないやうに、控室で丁度時計で十分の間「空氣を

入れ換へ」ねばならなかつた。彼女は多くの本の中にうづくまるやうにして、ギラ／＼するやうな多彩な首巻を巻きつけて、特に彼女のために倍の長さに作られた、決して絶えることのない、きついハバナ煙草のもう／＼とした煙の中に腰掛けてゐた。彼女は年と共に段々病的な神秘主義に没頭し、現實の生活といふものをもう理解し得なくなつたのである。改宗者を作らうといふ彼女の病的な慾望はだん／＼高まつて行く盲信の一つの證據であつた。そこで彼女は、例へばビュローやビュローの母をカトリックに改宗させようとしたのである。このやうな状態にあつては、侯爵夫人とリストとの交際は實に苦しいものとなつた。そしてその交際は、今では彼が過去に捧げた犠牲に過ぎなかつた。然し彼は、侯爵夫人が曾て自分のために惱んでくれたことを決して忘れてはゐなかつた。そのために今は、彼女は本質的に生活して行くための相手ではなく、唯想ひ出に連なるに過ぎなかつたのであるが、その時にも彼女の近くにあることに耐へ忍んだのであつた。

九月の間に、リストはシエナに逗留してゐたワーグナー夫妻を永い間訪問した。彼はまた、こゝでホーエンローエ侯爵夫人によつてウィーンから送られたスタニスラウスの歌詞を受け取つた。今では、彼はスタニスラウスを作る氣になつてゐたのである。ディンゲルシュテットがリストに見せた改作は、オラトリオとしては餘りに芝居臭いものと思はれた。侯爵夫人はディンゲルシュテットと面と向つて對立してゐるといふのではなかつたが、その改作は先づ侯爵夫人の氣に入らなかつた。そこで遂にその歌詞の最後の改作者は、マリー・ホーエンローエ侯爵夫人の息子達の教育者、エルドマン・エドラーといふことになつた。だが、それにも拘はらず、その作曲はこの年にも少しも涉らなかつた。

一八八一年一月の半ば、リストがベストへ歸つた時、彼はラディアル街にある國立音樂學校の建物の中の新居に移つた。彼の大サロンは、左右開きの戸によつて三臺のグランドピアノの備へてある、音樂學校の大音樂堂と直接に續

いてゐた。淡青色のビロードで作られた部屋は、ハンガリア貴族の夫人達から贈られたものであつた。凡ゆる器具や調度は、愛らしい女の手になる藝術品を思はせるものであつた。窓と窓の間には、ウィーンの友達から贈られた立派なベーベンドルフのピアノがあつた。壁には大浪にもまれてゐるランチスクスと、鳥の説教といふドールの繪が掛つて、藝術的な趣味を表してゐた。このサロンは、非常に澤山の訪問客の時だけに用ひられた。こゝから小さな食堂を通つて、非常に簡素なリストの仕事部屋兼寢室に通じてゐた。浴室、臺所、女中部屋は、夫々一間づつ完備してゐた。今やこゝでリストは召使ひと一緒に暮したのである。食事はマリーといふ名前の年老いた女中が作つたり、料理店から取つたりした。かうして彼は全く、見知らぬ人々の助けと、見知らぬ人々との交際を頼りとしてゐたのである。アウグスト男爵の姪、フォン・ファブリ夫人は侯爵夫人の勧めによつて、時折彼の面倒を見た。七十歳の男にとつて、彼が屢々激しく必要としてゐたと思はれる行き渡つた世話をする人もない、このやうな獨身生活は、彼の健康を犠牲にする基とならなければならなかつた。そして彼は非常な孤獨に苦しんだのである。かゝる状態になつて、彼は思ひ遣りをもつて差し出された手にはいつも感謝し、彼が後年、女弟子リナ・シュマールハウゼンに示した特別な愛や、父のやうな愛着は、こゝからしてのみ説明されるものである。彼女は一八七九年に、アウグスト皇后の紹介でリストの所へ來たのであつた。若い娘の快活なはしやぎ振りには、彼を喜ばせた。彼女はベストでは一日中、彼の所に居り、また彼女の力で能ふ限りは、彼のために心の住家を作つてやらうとしたのである。彼女は、リストのために食事の準備をしてゐたので、彼はもう體によくない料理店の食事を云ひつけなくてもよかつた。その時、彼の健康状態も顧慮され得ることになり、又彼女は彼が衣裳を着更へた後で、物を讀んで聞かせたり、色々と面倒を見たりしたのであつた。

一八八一年二月にビューローは尙ウィーンとベストでリストのピアノの夕べを行つた。それは彼が云つたやうに、

それで「昔の負債を支拂はん」がためであつた。ハンスリックはその時、二月二十八日の新自由新聞に於て「短調ソナタに就いて次のやうな批評を行つた。『未だ曾て私は支離滅裂な要素の、これ程老癯に、大膽不敵につき合はされたものを聞いたことはなかつた。又これ程の混亂せる狂暴、音楽的な凡ゆるものに對する、残忍なる闘争を體驗したことはなかつた。初めは呆れ果て、次には仰天したが、最後に私はどうしようもない滑稽さによつて壓倒されたやうに感じた。この滑稽さは、聞きとれない程の音と仰々しい大きな音によるこの發作的な格闘の中や、大抵の場合は殆ど無駄に終るやうな、この息切れのする勞作の中にあり、又この天才の蒸氣粉磨工場の中にあるのである。ここでは又批評や論議は一切意味をなさい。それを聽いて而もかなりのものと思ふやうな人は、もうどうすることも出来ない。』」リストは心から深くビューローに感謝してゐた。四月の初めに彼は、友人のツイヒーを連れてベストを後にし、フムメルの記念碑のために、プレスブルグの演奏會でツイヒーと一緒に演奏した。こゝから二人はエーディンブルグを通つてライディングに赴いた。そこではリストの生家にかげられた記念額の除幕式が行はれた。ツイヒーは以前一八五六年に、既に試みたやうに、ウィットゲンシュタイン侯爵夫人にその家を買ひ取らせようとしたのであつたが、それは入手し得なかつた。

この夏の數箇月は、多端な時であり、緊張した時であつた。樂長のオランダ人、アレクシスの骨折りによつて首尾よくリストはベルリンのチェチリア協會によるオラトリオ・キリストの演奏に出席することが出来た。リストは四月廿三日にこゝに到着して、大臣フォン・シュライニックの邸宅に泊つた。彼の孫のダニエラは、既にこゝに來て居つた。翌日ウィンターガルテンで、ワグナー協會の主催の下に公けの歓迎祭が行はれた。この時には祝典樂(マンシュテットの指揮による)とプレリュード(レスマンの指揮による)が演奏された。祝祭の後リストは尙少時の間三百人以上も集

まつた祝典宴會に留り、それからオラトリオ・キリストの總練習に出席した。翌日の演奏は嵐のやうな喝采を博した。ビューローはリストの斡旋によつて、コジマと別れてから初めて、再びベルリンで自分の子供ダニエラと會つたのである。リストはどこまでも、このことに義務を感じてゐた。ベルリンからリストは、演奏會に出席するためにフライブルグとバーデン・バーデンへ直行し、かなり疲れてワイマールに歸つて來た。侯爵夫人は、體を大切にすゝやうに切願したが無駄だつた。五月半ばには、既に彼はその音樂協會の主催による音樂祭に招かれて、アントワープへ行つた。リストはマイエンドルフ男爵夫人を連れて、アントワープに赴き、富裕な門閥家リュネンの家に滞つた。市と市民は、彼の榮譽を讃へることで張り合ふ程だつた。祝典演奏會は五月二十六日に催された。大きなハルモニー會館は三千人を收容し、入場券は十フランもしたにも拘はらず、總練習の時と演奏會の時は會館は溢れんばかりであつた。ペノアはグランのミサ曲を指揮し、アンナ・メーリッヒは變ホ長調協奏曲を演奏し、ツァレムブスキーは死の踊りを弾いた。リストはこゝで初めて管絃樂伴奏附の死の踊りを聞いたのである。各番組が終つてから、リストは嵐のやうに稱讚され、最後に市長は挨拶を述べた。そして彼の名前をアントワープ市の記念帳に記入してくれとリストに差し出した。藝術家集會の宴會を以て、その夕べは終りを告げた。翌日リュネンは、彼の家にアントワープの上流の人達を皆集めた。それはリストの藝術家としての生活の讚美をまさしくと表す寫し繪となつた。最後にリストは演奏して、感謝の意を表した。それから續いて、リストの弟子フランツ・セルヴァイスとツァレムブスキーの肝煎りで、ブリュッセルに於て祝典演奏會が催された。ここではセルヴァイスの指揮によつて、タッソーとファウスト交響樂が演奏され、ツァレムブスキー夫妻によつて悲愴協奏曲が演奏された。それに續いて行はれた宴會の席上で、ブリュッセル音樂學校長であり、且つベルギー音樂界の最高峰とされてゐたF.ゲベールトは、極端な程の乾杯の辭を述べて巨匠を讚

美し、リスト祭を讀へてゲールツによつて作られた記念牌を彼に贈つた。

ワイマールへ歸つて來るともう、マゲデブルグの音樂家總會が彼に出席を求めて來た。こゝでは、初めてアルトール・ニキッシュがリストの作品(山嶽交響樂)を指揮した。それからワイマールでは、この夏の間四十五人の弟子達が彼に付き纏つてゐたのであるが、その間出來得る範圍内で、彼は少しの間休養することが出來た。ビューローは二三週間ダニエラと一緒に訪れて來た。兩人は、こゝで初めて本當に正しい意味の知己となつた。且つリストとダニエラの感化によつて、遂にビューローとコジマはニュールンベルグでうまく會ふことが出來たのである。この會見はビューローの過度に興奮してゐる神經狀態に好影響を與へたのである。ビューローがワイマールに居る間に、リストはひどい災難に遭つた。といふのは、彼は宮庭庭園の階段から墜落して、頭に挫傷を受けたのである。容態は少も危険ではなかつたが、彼は永い間病らひ、もうどうしても完全には癒らなかつた。友人の氣遣ふまゝに、彼はハルレのフォルクマンに診斷して貰つたところ、彼はこの腫物のためには熱い温泉がよいと云つてくれた。彼の體力の衰弱は、段々と進んで行つた。ビューローがこの年の初めには尙、ペストからリストの「特別な肉體的、精神的新鮮さ」を嬉しうに讚へることが出來たのに、今では心配しながら書いてゐる。「彼の當惑さや肉體的な(困つたことに、精神的にもさうだつたが)虚弱さは、若しも放任されたまゝであると、ほんとうの不幸に見舞はれるかも知れない程、日に日にその度が高まつて行つてゐます。」そこで彼がイタリアへ旅行するに當つては、誰か隨いて行くといふことが望ましいやうに見えたので、遂にダニエラは、リストが九月の終りに二三日滞在してゐた所のバイロイトからローマまで、一緒に行つたのである。かなり疲れてリストはこゝに到着し、再びアリベルト・ホテルに宿をとつた。彼は何時も非常に疲れて居り、屢々仕事をしながら眠り込んでしまふのであつた。彼は以前とは反對に、周圍の者には實に無關心

のまゝであつた。部屋は常に熱過ぎるやうにしてゐたにも拘はらず、彼は始終寒かつたのでデステの別荘へ移ることは止めたのである。彼は屢々立つことが出来なくなつたやうなことがあつても決して病氣だとは云はなかつた。彼は徹底的に、自分の健康に對しては無關心であつた。人々が彼の健康状態を尋ねるやうなことがあると憤慨してゐた。「御機嫌は如何ですか」と云はれると、彼はいつも「相變らず元氣です。私はフランツ・リスト一人のことだけにかはつてはゐません」と答へた。だん／＼と彼は回復して來て、かなりの健康状態で七十歳の誕生日を祝ふことが出來た。コイデル全權大使は彼に敬意を表して、リストの肖像と胸像の飾つてあるパラッツォ・カファレルリの會館で音樂マチネーを催し、そこで新しく創立されたローマ五重奏團（スガムバッティ、モナケシー、E・マシー、ヤコバッチ、フリーノ）が初めて演奏して聞かせた。外國からこの日、巨匠に夫々の稱讚の意を表した友人や弟子達の無数の祝賀状や電報が送られて來た。

早朝侯爵夫人から、次のやうな手紙を受取つた。「私の大切な人よ。貴方の七十の歳はヴォロニンスで十月二十二日に照り輝いた太陽の光の下に始まります。——

永遠の氣を呼吸しなさい。私が貴方を神にかけて吾がものにし、貴方を神に與へようと欲したのもこの永遠のためです。——お目出度う。そして永遠にお目出度う。大切な私の人よ。私はサン・シモンの召使の役で満足です。毎朝その主人に、貴方は大事なことを澤山しなければなりません。と云ひながら、どうしてそれをなすべきかといふことを教へてくれる神は、又この世でもあの世でも、それを賞め讃へることをも知つてゐます。完全な酬いを待つて、日々の些かなことを快くやりませう。祭壇の下に始まる一日の如く。——吾が主と共に。——やがて貴方に大いなる奇蹟を與へてくれる人の前に。即ち、聖フランソアは多くの奇蹟をなされたのです。そして彼は名譽——世紀の名譽を

獲得した貴方のためにも亦、彼は奇蹟を行ふでせう。——」

ウィーン市からも「彼の心からなる慈善行爲を忘れずに」公式の祝状を寄越した。そしてウィーンの音樂界はリストに素晴らしいアルバムを贈つて、リストに敬意を表した。ワイマールでは巨匠の誕生日を聖エリザベートの上演を以て祝ひ、ライプツヒのリーデル協會は、オラトリオ・キリストの成功した演奏によつてこの日を祝つた。全ドイツ音樂協會は既にマグデブルグの會員全部に、この日を記念するため、ウイッティヒの作になるリストのメダルを渡された。藝術的に羊皮紙の上に書かれた賞状をリストは、コイデルを通して誕生日に贈られたが、それには次のやうに書いてあつた。

「稀なる偉大さと倦まざる獻身の氣持を以て創作し、指揮し、教授し、誰も到達し得ざりし彼の音樂生活を名聲あらしめたる偉大なる藝術家、尊敬すべき愛すべき巨匠に數百萬の人は感動す。——而して數千の人に光り輝く手本となりし、その人の名を世界の人は驚嘆を以て、吾等のグループは、忠誠なる愛と尊敬とを以て、かく呼ぶ。

フランツ・リスト

一八八一年十月二十二日は、彼の生誕祭の七十回に當る。この日、巨匠がその創立の日より會員であり、獎勵者であり、而も保護者であつた全ドイツ音樂協會は、その衷心よりの祝辭と、その最も厚き感謝の念を捧ぐ。而してより高き尊敬を拂ふ考へにはあらず、寧ろ衷心よりの歸依と一致の感謝より、その參與が吾等の榮譽を如何に高むるやを充分に意識し、フランツ・リストをその名譽會長に推戴す。一八八一年六月十二日のマグデブルグに於ける全ドイツ音樂協會の總會に於て、かく決議す。」

ローマよりのリストの出發は、一月末と決定された。侯爵夫人は、彼の未だ動搖する健康状態を氣づかつて、彼を

制へようとした。彼女はペストに居る彼女の友に宛て、リストは病氣だから旅行をすることは出来ないといふ手紙を送つた。そのために、新聞にはリストが重病であるといふ噂が書かれた。然しリストは彼の義務を果さないわけには行かず、一八八二年二月八日にペストに到着した。こゝに來ると彼は急速に身體を回復し、又間もなく元の元氣が出て來た。彼はフムメルの記念碑を建てるためのプレスブルグに於けるビュローの演奏會にも出席した。この頃ペストでは「ピラトの前にあるキリスト」といふ繪が非常にセンセーションを捲き起してゐた。之はミヒエル・ムンカッシーといふ藝術家の手に成るものであつた。リストはその時、この人と知り合ひになつたが、兩人は間もなく親交を結ぶやうになつた。ムンカッシーは夏に、リストの肖像畫を畫くために、ワイマールを訪れると約束した。

四月の初めに、リストはそれから再びワイマールに行つた。この夏の弟子達の中には、ダルベール、ワインガルトナー、ルッター、フォン・ツァイル、ディンゲルダイ、ベンチネ、エムマ・グロースクルト、A・シュピールリンクが居つた。然し彼が到着後數日にして、フランス語でエリザベートが初演されるのを見に行くために、ブリュッセルへ向けて旅立つた。緊張せる祭典のために、本當に疲れて彼はワイマールに歸つて來た。ところが間もなくフライブルグで、リスト演奏會をするといふので彼を呼んだし、又チューリヒでの音楽家總會(七月九日より十二日まで)にも行かねばならなかつた。こゝからは彼は直接バイロイトに行つたが、こゝではバルシファルの初演があつたのである。既に五月ワーグナーは、この作品のピアノスコアを彼の所に送つて來たが、それには「おゝ友よ。吾がフランツよ、汝、第一の面も唯一の友よ、汝のリヒアルド・ワーグナーの謝意を受けよ。」と書かれてあつたのである。リストはこの作品に深く感動し、「その振子は莊嚴なるものから、最も莊嚴なるものへと揺れてゐる。」と評し、侯爵夫人に感激して次のやうなことを書き送つてゐる。「私の考へそのまゝです。條件なしに、恐ろしい驚嘆だと云つてもよいでせう。パ

ルシファルは名作どころではありません。——それは音樂劇に於ける天啓です。ワーグナーは地上の戀の歌を唱つて『トリストアンとイゾルデ』を書いたが、彼がそれを狭い劇場の中で出来る限りのものを盡し、バルシファルでは、神の愛の最高の歌を最も稱揚すべく唱つたものと人に云ふのは本當です。之は現世紀の驚嘆すべき作品です。」

上演の後、ワーグナーは共演した藝術家のために祝宴を張り、乾杯の辭の中で次のやうな感動的な告白をした。「私がドイツ語で述べることを全然斷念しようとした時に、リストがやつて來ました。そして心から私を深く理解し、私の創作を指差しました。彼はこの創作を勧めました。彼は私を支持してくれました。私を向上させてくれました。誰もこんな人は他に居りません。彼は私が住んでゐた世界と外の世界との間にあつた結合帶です。それで私はもう一度フランツ・リスト萬歳と呼びます。」

五回目の上演後リストは、彼とそこへ同伴して來たマイエンドルフ男爵夫人に促されて、ワーグナーが大變心配したのであつたが、ワイマールに歸り、再び最後の上演の時、又もこの祝典劇場の町に戻つて來た。こゝで彼は尙、彼の孫のブランディーヌの結婚式に臨み、それから再び宮廷庭園に歸つて行つた。

その後間もなくマイエンドルフ男爵夫人は自分の性質に合はないと云つてワイマールを去り、ローマに行つた。そのため毎晩彼女の所に暮さねばならなかつたリストは、自由になり、彼の弟子達との交際も前よりもつと親しくなつた。今まで彼は彼等の招待に全然應じなかつたが、今度はよく彼等の中の二三人と一緒に料亭「エルププリンツ」に行つたものである、一八八二年の秋は、宮廷庭園の凡ゆる年の中で、最もよい、最も愉快な時であつた。巨匠自身は若返つて、彼を取り巻く青年達と愉快に暮した。九月廿九日若いダルベールが、彼の最初の演奏會をワイマールの娯樂場で催した。リストはこの弟子の優れた才能に特別感激し、凡ゆる點で彼を賞讃した。宮廷の人々もこの演奏會

には出席した。そしてダルベールは大勝利を得たわけである。彼は久しくワイマールで行はなかつたリストの誕生日の前祝ひとして、宮庭庭園の狭いところで夕食を共にした。翌日劇場では、リストの演奏會が催された。こゝでもダルベールは矢張り獨奏者として共演し、ラッセンの指揮の下にリストの變ホ長調協奏曲と、それから第二狂詩曲を演奏したが、之には彼は独自のカデンツを書いた。大公は、そこで彼に宮廷ピアニストの稱號を與へた。リストは「彼は、その稱號を擔ふのに充分實力があり、彼は本當に優れた演奏をし、そしてこの稱號を得たことにより、ワイマール人は少くとも一般に彼が尊敬されてよい程に、尊敬することになる。」と云つた。そして「彼は明日、直ぐ宮内大臣の所に行かねばならない。——そして謝辭を述べ、形式上の過失のないやうにせねばならぬ。——さて私は明日先づ彼に、新しくなつた『宮廷ピアニスト』のために理髪をしてやる」と云つた。

十一月の初めに、リストは尙マリアンヌ・ブランドとアントン・ルビンシュタインの訪問を受けて喜んだ。リストはルビンシュタインを自分の客として家に泊めることが出来なかつたことを非常に悲しく思つてゐたので、今度は彼のために宮庭庭園の小さい部屋を提供した。(常にそこに泊つてゐたのは、ギルレ一人であつた。リストは自分のベッドを彼のために割讓し、自分は音楽室の小さいソファの上に寝た。)ルビンシュタインのために、リストは四十人以上の社交を催した。食事は料亭、エルププリンツから運んで來た。彼は自分のことは非常に簡單で質素であつたが、彼の客に對しては非常に心配し、大したもてなしをした。大變な御馳走であつた。食卓は豊かなものであつた。彼は、自分でこれつきりと云ふメニューを要求した。彼は又美しい化粧室のためにも同様に、驚くべき感覺を有つてゐた。

「婦人用のレースとか毛皮だとか、寶石とか、そのやうなことは私はよく分らないが、男子の場合では時計や鎖以外には、裝飾品は無用だと思つてゐます。私は立派な毛皮を持つてゐましたが、身に着けたことはありません。それは

宮庭庭園の階段の床の上にありました。それが或る日のこと盜まれたので、却つて嬉しい思ひでした。」ルビンシュタインとの晩餐の後、いつもかうした社交の後のやうに、音楽はなかつた。「もうやることは止さう。ルビンシュタインは充分に音楽を聞いてゐるのだ」と、リストは云つた。人々はその代りにカルタ遊びをした。リストはこれが好きだつた。晩には、それは彼の唯一の娛樂であつた。夜獨りで過すのは、彼は嫌ひであつた。彼は孤獨で不幸だと感じた。彼はそこで食事の後、いつも數人の弟子とか友人と ترامプをしてゐるのであつた。

マイエンドルフ夫人は、この冬ローマに滞在したので、リストはそこへ行くことを得策だとは思はなかつた。そこで彼は十一月の半ばまで、ワイマールに留り、それからヴェニス、ワーグナーの許(ウェンドラミン宮殿)へ旅した。そしてそこに彼は一八八三年の一月半ばまで滞在した。これは兩人が一緒に會つた最後であつた。この時は特に愉快なものであつた。リストが或る時、巨匠に彼の教會音楽の作曲を弾いて聞かせたところ、ワーグナーは、終つた時「汝の愛する神は、然し多くの光榮を與へたものだ」と叫んだ。之に對してワーグナーが、それからピアノに坐りベートーヴェンの何かを弾いた時、リストは彼に「それを私がつとよく弾きませう」と叫んだ。——友人リストがやつて來た時は、いつも彼は全家族から喜びを以て迎へられた。いつかワーグナーは非常に喜んで家中を飾り立てたが、リストが餘りあつさりとしてゐて、彼のためにしたことがよく分らなかつたので、子供達に冗談混りで少し怒りながら「彼はまだそのことが分らないのだ」と云つた。凡ての事に友人リストは参加せねばならなかつた。ワーグナーが永い間憧れてゐたことは、遂に達せられた。確かなお互の愛に於て誤解のない、自由な氣持の、のび／＼とした交際は何物も神經質的に受取られるやうなことがなかつた。それと共に眞面目な藝術も、然し等閑に附せられるやうなことがなかつた。屢々リストは主としてバハやベートーヴェンを彼の前で弾いたが、ワーグナーは一心不亂にそれを聞い

てゐた。バイロイトの様式の計畫のやうな理論的な藝術上の問題等も、熱心に討論された。之と共にリストは、今まで経験したことの無いやうな本當の家庭生活を、こゝで初めて味はつた。孫共と彼は愛に充ちた交はりをした。そしてヴェニスでクリスマスの祝ひの少し前に、彼は老齡にもかゝらず、子供達に贈り物を買つてやるために、自分で店まで行き、自分で家に持つて歸つた光景は、實に感動的なものであつた。このヴェンドラミンの生活をダニエルの手紙はよく描いてゐる。

「午前中はおぢいさん(リスト)は主に獨りでゐます。十一時頃に、私はおぢいさんのところに行きます。するとおぢいさんは温い所に腰かけてゐて、陽の當つてゐる運河を眺めてゐます。そして腰を屈けて手紙や樂譜に向ひ、いつも何かしてゐます。少し経つてママはおぢいさんの方を眺めるのです。そして二時頃私共は晝食に集まります。食事をしてコニャックのない一杯のコーヒを飲むと、バサーニが起しに行くまで、おぢいさんは晝寝をしてゐます。目を覺ますと、お話しをします。六時頃、おぢいさんは私どもの所にやつて来て、七時半頃まで夕食の時まで音楽をします。十時に寝るまで、それからは ترامプをして遊びます。」

一八七二年以來、毎年二人は會つてゐて益々二人を衷心から親しくしてゐたのであるけれども、兩人の鋭く刻印された内面的な不協和は、兩方からいくらか好意を寄せても充分には解けなかつたのである。リストがワーグナーの、どこまでも彼の方に近づかうといふ絶えざる願ひについて來ることなく(既にワイマールやベストで、彼が責任を回避したことはそれを不可能にした)、そのためによく冗談半分にも怒つて「行け、お前、年老いたローマ人よ」と云はしめるやうになつたとしたら、永い間一緒になつたことが、唯誤解に終らねばならなかつたといふことを、はつきり意識することになつたであらう。二人の中どちらも彼等の圍りのものを中心人物になる事には餘りにもよく慣れてゐた

のであるが、リストの友人に對する善良さと寛大な尊敬とが唯、個人的交際に於てうまく、凡ゆる不和を避けてゐたのである。この尊敬は次の詩に於てよく表明されてゐる。「汝若し我に不正を爲したにせよ、我は常に汝に正しきことを爲す。我をみだりに叱る勿れ。汝の忠實なる、従順なる、フランツィスクスを、こは必ずや迷はずことなからん」と。生活上の習慣や趣味は後年に於て、兩者の間に非常に相違があつた。即ちワーグナーは家族や最も親しい友人のグループに引籠り、興奮した話をし、一般に本を讀むのを好んだ。リストは之に反して、大きな世界を必要とし、サロンを愛し、サロンを缺くことが出来ず、サロンは彼にとつて生活必需品となつた。然し彼が小さい範圍に居つたとすれば、それは彼の愛する ترامプの集まりだつたし、それは彼にとつては立派な讀物よりもましであつたのだ。ワーグナーは之に對して全然理解を持つてゐなかつた。リストが、以前バイロイトの狭い隱退生活を訪れた際には、餘りひどくなかつたこの對立は、リストが非常に多く社交に入つたこのヴェニスでは、よく感ぜられるやうになつた。そこで別れるときワーグナーは冗談半分に「こんど吾々は反對の方向をとつた」と云つた。

ヴェニスでリストは、又スタニスラウスの仕事に再びとりかゝつた。そして彼は侯爵夫人に「歌とピアノのための作品を殆ど半分」完成したと報ずることが出来た。その他運河のゴンドラの^{エレジー}悲歌に刺戟されて、一つのエレジーを作るに至つたが、それに彼は悲しきゴンドラ(Trauergondel)といふ名をつけた。人々はこの氣分がワーグナーの死に關係があるのだと云ふが、リスト自身はこれを後に、その「換感」だと云つた。一月の半ばにリストはワーグナーと心からの別れをし、ベストに歸つて來た。彼はワーグナーともう會ふことはなくなつてしまつた。その後數週間に於て彼の偉大なる友ワーグナーは死んでしまつた。二月十四日にリストの最も古い友人のコルネル・アブラニーがブタペストのリストの仕事部屋に入つて來て、「先生、ワーグナーは死にましたよ」と苦しさうに云つた。リストは机から

頭を上げず静かに仕事を続け、そして簡単に「何故！ そんなことはない」と云つた。アブラニーは當惑して見てゐた。そして何も云はなかつた。「人は何遍も死んだとか、重病だとか云つてゐたが——皆つまらぬことだ」と。そこへタボルスキーが號外を持つて入つて來た。そして先生の机の上に何も云はずに置いて行つた。彼は當惑してそれを讀んだが、未だ疑つてゐた。「若し本當だつたら、私はもうとうに聞いてゐたに違ひなかつたのだ」と。彼は直ぐコジマに「ワグナーはどうか」といふ電報を出した。さうしてゐる中に多くの弔電がローマ、ワイマール、ウィーン等から彼の所に到着した。リストは今となつては、もう疑ふことが出来なくなつた。とうとう數時間後にヴェニスから返電があり、「ママは、こちらに來ないでベストに静かにして下さいと頼んであります。私共はミュンヘンに一寸留り、屍體をバイロイトへもつて行きます。ダニエラ」と。彼はそれを下に置いて「今日彼は——明日私は」と云つた。彼が親しい死の知らせをさへかうした同情を以て受けとつたといふことは、リストの注目に價する性格である。このことは彼の次のやうな考へ方にあてはまることであつた。「死ぬことは生きることよりも、私には簡単なやうに思はれる。死は——長い、恐ろしい死の苦痛がそれに先行するとしても——吾々を不自由な束縛から、原罪の繼續から解いてくれるのだ。」——コジマ自身からリストは何も受けとらなかつた。彼女は唯、先にバイロイトに行かないやうにと頼んで來た。そしてリストと親しく交はつてゐた畫家のヨウコフスキーを通して、彼が所有してゐるワグナーの文書のことに関する彼女の希望を傳へて寄越した。彼はそこで普通のやうに四月の初めまで、ベストに留り、そこからワイマールへ行つた。

こゝで彼は、弟子のダルベル、マリイ・ヤエル夫人、エムマ・グロースクルトに會つた。二日後彼はヤエル夫人、ヤリナ・シュマルハウゼンと一緒に、マールブルグに赴いたが、ここではエリザベト教會の六百年記念祭のために、彼のエリザベトが上演された。彼はこゝでは彼の甥のフランツ・フォン・リストの所に滞在したが、甥はこゝで、法律の教授をしてゐたのである。この小さな町は立派に飾られ、彼等の高貴な客にありとあらゆる仕方で、尊敬の念を表さうとした。演奏會の後リストは、月桂冠と敬意を表した詩とを渡されたが、この詩は聖エリザベトの像を入れた書面の上に書き込まれてあつた。彼の甥が催した祝宴には、リストはこの甥の父エドアルドに捧げられた變ニ長調の練習曲を演奏した。彼の愛する甥の家で過した愉しい日をリストはなほ、永い間親しげな氣持で想ひ起したものであつた。マールブルグから、彼は音楽家總會のためにライプツヒヒに赴いたが、こゝではダルベルとライゼナウアーが停車場に彼を迎へた。ダルベルは音楽祭に變ホ長調協奏曲を弾いた。そして演奏會が始まる少し前に、彼に起つて來た妨害があつたけれども、素晴らしい成果を収めた。緊張は彼の状態を危険なものとしなかつたが、リストはダルベルがタウジヒと演奏上も、外見上も非常に似てゐたので、タウジヒのやうに彼の青年の花をかきむしられるのではないかと大變心配してゐたのであつた。若い藝術家は既に名譽を回復した。ライプツヒヒでリストは、ワグナーフリードから一本の手紙を受けとつたが、ワグナー夫人は誰にも會ひ度くないから、バイロイトへの訪問をもつと延期してくれるやうにと云つて來たのであつた。コジマ夫人が凡ての人々に會はなかつたといふことは、リストは知つてゐたが、リストをも例外としなかつたことは、彼をひどく悲しませたことであつた。

リストは、ワイマールに歸つた。そこで五月十五日に規則的なレッスンを再び始めた。この夏の弟子の中には、次のやうな人々があつた。ダルベル、アーサー・バード、W・バッヒエ、ブルマイスター、タヤス、デラ・スツダ・ベイ、エックホッフ、フリードハイム、ルッター、ライゼナウアー、シロテイ、ポーリヒの他、婦人達にはE・グロースクルド、ヤエリ、E・コッホ、M・レメルト、オーエの貴族達があつた。全部で四十二人であり、それに平均して尙二十人

の聴き手が居つた。ワーグナーの誕生日には、劇場でワーグナー大演奏會が催されたが、そこでリストはバルシファルの前奏曲と受難日の悪魔を指揮した。當日は彼の絃樂四重奏曲「リヒアルド・ワーグナーの墓場にて」が出来上つた。リストはその草稿に、バルシファルの動機と彼のストラスブルグの鐘とを融合合はしたといふ次のやうな序文を書き添へた。「リヒアルド・ワーグナーは、曾て彼のバルシファルの動機と私が以前書いた『エクセルシオール』とが似てゐるのを、私に想ひ起させたことがある。この想ひ出をそのまま變らないで、残して置き度いものだ。彼は現代の藝術に於ける偉大さと高さを齎した人である。一八八三年五月二十二日。」

その他は毎日同じやうに過ぎ去つた。リストは大抵四時に起き、七時に「リナ」にミサに連れて行かれるまで、仕事をし、それから朝食をし、暫らく休み、それから晝食まで又仕事をする。彼は大概は友人や弟子と「アルムブルト」で食事をし、食後四時まで休んだが、それからレッスンが續いて行はれ、それが済むと ترامプをした。八時に彼は常に、再びワイマールに來たマイエンドルフの所へ夕食をしに行き、九時には普通は寝ることにしてゐた。ベルリンから來た優れたハーピスト、ウィルヘルム・ポッセが一寸滞在したことは、リストをこの夏大變喜ばせたのであつた。

リストの弟子と結婚した彼の女弟子の紹介で、ポッセは夏休みをワイマールに暮すことにしたのであつた。彼はリストのレッスンには、最初は唯聴き役であつたが、リストがハーブが大變好きだつたので、彼は間もなくこの宮廷庭園で彼の樂器を鳴らさせることにした。「愛の夢」の第三を編曲して、ポッセは特別の賞讃と共感を得、或る日のことリストはレッスンが始まる前に、次のやうな挨拶を彼に述べた。「吾が愛するポッセよ、貴方は恐らく既に生涯中、父は子供達の中で不具なものを好きになるといふやうなことを御覽になつたことがあつたでせう。私はこゝで、私の音樂の不具な子供を有つたのです。そしてそれを好んで貴方によつてハーブのために編曲していただき度いのです。」そ

の曲は「巡禮の曆」第一卷の中のアンゲルス（天使の祈り）であつた。リストはポッセの仕事に、非常に満足した。彼はポッセの才能を高く評價し、推薦して一般の承認を得させようとした。

九月二十一日（一八八三年）に、リストの弟子アレキサンダー・シロテイは、彼の友人で同僚たるA・エックホッフと共にワイマールで、彼の最初の演奏會を開いた。彼はこの年の五月にリストの以前の女弟子パウリーネ・ツイヒトナーの紹介で彼の所に來たのであるが、速かにリストの正直な共感を得たのであつた。彼は管絃樂附きの死の踊りや、リストの澤山の獨奏曲を演奏し、彼を非常に満足させた。十一月十九日にはシロテイが、あの保守的なライプチヒでリストのピアノの夕べを開催することを敢行したが、而も大成功を収めた。巨匠は澤山の彼の弟子達と共に、そこに出席した。シロテイはその後、引續いてライプチヒに居ることになり、毎週レッスンを受けにワイマールに來た。

リストはこの年、初めて冬中をワイマールで暮した。といふのは、侯爵夫人とのかなり激しい不和が起つたからであつた。だがこのワイマールの秋と冬は、彼によつて不幸な時代であつた。彼はマイエンドルフ男爵夫人との關係にひどく悩んだのであつたが、彼女は彼に對して物凄いい力を與へたからであつた。そしてリストが數人の女弟子のために、彼女と時には激しい不和を生じたことがあつた。それに附け加へて置かねばならぬのは、彼のやうな老齡には危険でないことなかつた時々の興奮が、彼の健康を非常に害したのであつた。兩人のこの關係をよく物語つてゐるのは、次の男爵夫人に宛てたリストの手紙である。「私の手紙は、貴女に面と向つては不快であることを私は知つてゐますから、貴女に御手紙を差上げるのを躊躇した次第です。然しそれでも貴女はコペリアのバレエ『自働人形』のことで非難されなければならないのは、仕方がありませんから御許し下さい。この悪い冗談を他の人から聞いたのではな

いかと私は恐れました。そのことは私によつて非常に苦痛なことですから、後になつて貴女は昨晚シュレーツァー（ヴァ

ティカンに居るプロシアの公使)に、非常に機智に富んだ答へを致しましたね。然しこれから間もなく貴女は簡単に云ふと、かうした澁面を以て私のことを考へたやうですね。そんなことは貴女に、非常に忠實な下僕であるリストには残念なことに、知らないことです。

私一個の考へによりますと、かうしたあり来りの安價な惡意を濫用なさるやうな精神と、判断を御持ちになつてゐるとは思へません。」

十二月の半ば、リストはビュローの指揮する宮廷樂團の演奏會に出席するために數日マイニンゲンに滞在した。彼は既に以前、この演奏會を數回訪れたことがあり、彼の賞讃は非常なものであつた。この演奏會は最も貴族的なものであり、ヨーロッパに於ける器樂の高い生活に屬する」と、ビュローは唯、リストを個人的に好ぎだといふことを表すために、全く彼の熟慮に反して、「理想」をプログラムに載せた。そして試演の前にこのことを管絃樂員に話して、彼が彼等に期待しなければならぬことがあると云つた。リストはこの美はしいマイニンゲン時代を追憶するため「ビュロー行進曲」を作曲した。ビュローがその後一月六日に彼の樂團を連れてアイゼナハに演奏旅行をした時リストは又もそこへ出掛けた。この冬ワイマールに来て巨匠に、彼の歌劇サクンタラを提出したフェリックス・ワインガルトナーは、彼と一緒にあつたが、この晩のことについて彼の「リストの想ひ出」の中に澤山面白いことを詳しく述べてゐる。一月二十四日リストはワイマールを去り、彼はこの年もローマに行かなかつたから、再びベストへ赴いた。彼の召使アヒルが重病に倒れたので、マイエンドルフ男爵夫人は彼の所に自分の召使カールを遣したが、カールはリストがワイマールに歸つて来るまで、アヒルの所にゐてくれた。ベストではミハロヴィッチを通じて、新しい召使ミトラル或はミシユカといふ人を雇つたが、この人はリストの死ぬまで、彼の圍りに居つたのである。ベストから

リストは殆ど毎年さうしたのであるが、近くのブレスブルグを訪れ、そこで町の僧ハイドラーの五十歳祝賀のため、彼の戴冠式ミサ曲を指揮したが、その時は教會音樂協會が之を唱つた。リストがいつも彼のブレスブルグ滞在中訪問した彼の友人の中には、市の文書掛ヨハネス・バトカがあつたが、彼は今日も尙リストの熱心な擁護者である。

五月初め(一八八四年)、リストはウイーンを通つてワイマールに歸つたが、ウイーンではティルグナーによる彼の素晴らしい胸像が出来上つた。ワイマールでは五月二十三日より二十八日まで、全ドイツ音樂協會の二十五周年祝賀のため第二十一回音樂家總會が催された。ダルベール、フリードハイム及びシロテイが、その時獨奏者として共演し、最後を飾つたのはワインガルトナーの歌劇サクンタラであつた。音樂祭の開會はリスト祭として幕が下ろされた。當夜の冒頭はアドルフ・シュテルンが作つた祝典序幕劇であつたが、その中には山はリストの胸像を「イルムの精」によつて飾つたところであつた。それに續いて、聖エリザベートの上演があつた。指揮者としてのリストに、ワイマールはもう一度感激することが出来たが、之で最後となつた。彼はビュローのニルワナと彼のスタニスラウスよりの二つの部分を指揮した。その中の一つであるポーランドの國民歌「サルヴェ・ポロニヤ」は、他日大公の望みにより繰返した。七月半ば、リストはパルシファルの上演のために、バイロイトに赴いた。彼は去る夏、この祝典劇場の總理と呼ばれ、全部の上演に出席した。リストはワーンフリードの傍らのジグフリード街一番地の山林官フォン・フレイリヒ夫人の許に住んだ。彼の娘コジマには、バイロイトの數週間の滞在中一度も會はなかつた。といふのは、彼女は祝典劇場のための仕事の上の相談でなければ、誰にも會はなかつたし、彼女自身の父にさへも會はなかつたのである。リストは、それで非常に悲しい思ひをしたのであつた。

リストはそれから十月の半ばまで、ワイマールに留り、多くの弟子達に取り巻かれて生活したが、今まで述べな

つた人々は、ローゼンタール、ザウアー、サリー、リープリング及びヴァン・ドゥ・サンドである。九月の末に彼はミュンヘンに寄り道したが、それはニーベルゲンの指環を全部上演するのに出席するためであった。それが終つた時、彼の女友達ゾフィー・メンテルを彼女のテイロールの小宮イッテルに訪れた。この年もリストはワイマールからローマへ行かず、直ちにベストに赴いた。こゝから彼は友人ツイヒーを訪れ、その領テトレンに數日間滞在した。ツイヒーはリストの滞在のことを次のやうに述べてゐる。「人々は、大なる歡呼を以て彼を迎へた。數百の娘達は、彼の車に押寄せ花を投げた。リストは確かに感動し、帽子をとつてみんなに好意を以て挨拶した。翌日彼は私に云つた。「ゲツアよ、この立派な人々の歡迎は、私を本當に感激させました。私は御禮のために、彼等にピアノを弾いてやりませう。私が演奏したつて、人々は何も喜ばないかも知れぬが、私は演奏しなければなりません。若し、特に酒場が用意されてゐたら彼等は喜ぶでせう。さあ、場所が許す限り皆を招待ませう。貴方と貴方の子供達も手傳つて下さらねばなりませんよ。大演奏會が出来ます」と。そして一八八四年の九月十六日に、それが行はれた。演奏會の後、リストは非常に上機嫌であつた。彼は客のもてなしをし、彼等に食事を供へたり、彼等に葡萄酒を注いだりした。彼はハンガリア語が餘り上手でなかつたけれども、凡ての人はリストに魅了された。最後に眞白な髪をした農夫がリストの前に現はれ、コップを手にかう云つた。「吾々が貴方を何と呼んだらよいか、伯爵が教へてくれました。貴方が知つてゐるものを貴方は吾々に示してくれません。然し貴方がどういふ人であるかは、吾々は知りませんでした。それでハンガリアの大神が、貴方を祝福するやうに!!」と。

ベストはこの冬、非常に寒かつたのでリストは非常に健康を害つた。彼はそのことを、リナ・シュマルハウゼンに宛て、報じてゐる。「私の體の具合は、ワイマールに居た時よりも幾らか悪いと思ひます。眼はかすみ、神経は益々昂ぶるのです。それでも私が煙草の烟を燻してゐる間は、拙文が續けて書けます。而も前よりは普通に。ところが音楽上の約束を充分に果すには、なか／＼骨が折れるし、疲れます。今週私は又ローマに行き、一月の半ばにこゝに歸つて來ます。」

ローマでは、リストは然し温い陽氣のために體の具合が急に又よくなつた。彼は今度はヴィクトリア・ホテルに泊つた。侯爵夫人はアデルハイド・フォン・シヨルンに宛て、かう報じてゐる。「彼がやつて來た時には、體も、心も非常に硬直して居り、疲れて可哀相に見えたので、私は二日間、唯ジツとして泣いてゐました。段々に氣候が彼によい影響を及ぼしたので、彼の精神的な氣分のよさも回復して來ました。彼の精神が、如何に彼の健康に關係があるかが分ります。彼は餘り食べません。——だが、四時間以上榮養をとらずにはゐられません。——夜にはもう眠れません。若し身體に氣をつければ、彼はもつと長生き出来るでせう。——若し人々が彼のことをよく考へてくれ、若い者のやうに、彼を取扱つてくれないとすれば、例へば、あちこちと招待したり——いつも、そしてどんな所へも引つぱり出すやうなことをしなければ——彼の生命は一本の絲に懸つてゐるやうなものです。人はこれが分りません。而もその絲は速く切れることがあるのです。幸ひに彼の體が非常に丈夫です。さうでもなかつたら、彼はもうとりに、この世には居なかつたでせう。」

一八八五年一月二十九日、リストは既に再びベストにやつて來た。彼はこゝで音樂學校の最上級の者に教授をしたが、その生徒は約二十人で、大體餘り才能に恵まれた者はあなかつた。通學生の中には、リナ・シュマルハウゼンの他に、唯アウグスト・ストラダルだけが居つた。このストラダルは、一八八四年の夏に彼の弟子となつた。リストは控へ目な生活をしてゐたので、この二人は毎週交る／＼一回づつ、ホテル・ハンガリアか、ケーニギン・フォン・エンゲ

ランドかにさゝやかな夕食に彼を招待した。この時には、リストの友人達の樂譜商タボルスキーやコルネル・アブラニーがいつも出席した。この氣持のよい集まりで、巨匠は非常に氣分がよかつた。そしてこの集まりは大概夜中まで續けたものである。リストはいつもホテルのジプシー樂團からラコツツイー行進曲で歓迎された。そして大概はもう數曲、その中にはシンバルソロも入つてゐたが——演奏された。家ではリナと年老いた女中とで、彼の料理の世話をした。細切にした蝸牛、卵焼に茸のついたもの、蛙、腦髓に澤山の玉葱のついたものが彼の好物であつた。そして夕食にはいつも鮮に丸焼の薯のついたものと、ゆでたハム、それに赤い蕪菁やオリヅを缺かさなかつた。復活祭の前にリストは、數日をラコツツア・ポロタ(ペストから約一時間)のヴェルガの家族で暮した。ストラダルや音樂學校の學生や、ステファン・トーマンが毎日のやうにこゝへやつて來た。この氣持のよい日のことは、後まで彼の楽しい記憶として残つてゐた。リストはこの冬の數箇月間熱心に仕事をした。即ち、小さい樂曲「夢みつゝ」、「ツアルダス」、「ヴェーの圓舞曲の編曲、ハンガリア肖像の一部、及び十九番の狂詩曲が出來上つた。ストラダルは、その清書をした。そして又狂詩曲を「音樂教授連の演奏會」で初演した。リストはこれに非常に満足し、「彼の優れたる解釋のために、この愛する友ストラダルに感謝し」、この狂詩曲の素敵な見本を彼に贈つた。

ハンガリアの歌劇場、その前にはストローベルが作つたリストの立像が建てられたのであるが、この歌劇場の開場式のために、リストは、一八八四年ハンガリアの王歌を作曲した。ところがその動機を古い革命歌からとつたので、監督の考へでその演奏には「どうにもならない妨げ」が起つた。この作品の草稿をリストは、これで彼の友バトカに手渡したが、プレスブルグの合唱團がその後間もなく、彼等の寄金募集の演奏會に初演した。エルケルがこの時、この歌曲を新しく建てられた歌劇場開場式のための代りに「特別祝典」の際には演奏するやうにとの提議を出した。リ

ストは勿論承諾したが、それでも監督の感情はよくなかつた。そこで劇場はリストの音樂が少しも演奏されずに開かれることになつた。彼の王歌とタツソの演奏は三月二十六日に、非常な喝采裡に行はれたが、リストはそこに出席しなかつた。その晩以外には、多中リストの作品は全然演奏されなかつた。人々は彼を完全に無視した。音樂學校長のエルケルも、リストの意義に對してあまり理解しなかつた。そして新聞は彼に對して敵意を有つてゐた。ハンガリアの國民的特色はどうしても藝術及び偉大なる藝術にとつて興味を興へなかつた。若しもリストが公式に出たとすれば、それには心からの喝采が齎されたであらうが、さもなくばこの興味は間もなく失せてしまふのであつた。曾てフランスでは非常に大きな役割を演じたサロンは、ペストでは精神生活の中心點に立つてゐなかつた。アントラシー伯爵だけが獨り、それを採り入れようとしてゐた。そこでリストは、仰々餘計なものと考へてゐたかうした感情に無關心ではゐられなかつた。

四月の十二日に、リストはプレスブルグに赴いた。こゝでルビンシュタインがフムメル記念碑を建てるための演奏會を催したのであつた。彼の作品を廣めるために非常な貢獻をしたこの町に、彼が滞在したのは之が最後であつた。この演奏會が終つた時、ホテル・パルニヤイで開かれた祝宴の席で、バトカは次のやうな乾杯の辭を述べた。「リストがフムメル記念碑のために演奏したときに、プレスブルグは素晴らしい日を見たのであつたが、今日はピアノ演奏の二人の偉大なる巨匠が、この町の中に一緒に居るのだ」。その時ルビンシュタインは立ち上つて云つた。「これは私のことではありません。私とか、私のやうな者共は將軍フランツ・リストに比すれば、唯の雜兵に過ぎません」。プレスブルグからリストは、ウィーンを通じて直接ワイマールへ行つた。五月の末に、彼は音樂家總會のためにカールスルーエに來たが、この總會はフェリックス・モツトルの優れた指導の下に大變な成果を見たのであつた。パーデン大公はリス

トをこの上もなく祝福した。リストはバーデン・バーデンでドイツ皇后に敬意を表した後、ストラスブルグのリスト演奏會(一八八五年六月三日)に出席し、アントワープに赴いたが、それはこゝで彼の男聲のためのミサ曲を聞くためであつた。ライネルの家では、又も大きな宴會を用意してゐた。クニーゼがリスト演奏會を開催してゐたアーヘンを通じて巨匠は、遂に六月の終りに、この非常に榮譽ある、然し彼を非常に疲勞させた名聲の旅を終へて、ワイマールに歸つて來た。この時新しく彼の弟子になつた人はアンゾルゲ、ケレリヒ、ビュローの弟子であつたヴァイナ・ダ・モッタ及びベルンハルド・シュターフェンハーゲンであつた。ストラダスもワイマールにやつて來た。リストはライブチヒに何回も出かけた。こゝではシロタイが熱心にリスト演奏會を開いて宣傳に努めてゐたのであつた。以前既にワインやベルリンで多くの演奏會を開き、彼の先生の作品を勝利に導くやうに援助してゐたアルトール・フリードハイムと一緒に、シロタイはリストの夕でダンテ及びファウスト交響樂を二臺のピアノで演奏したが、その時は大成功であつた。ゲワントハウスに於けるフリードハイムの大成功を収めた變ホ長調協奏曲の演奏はライブチヒの鬭争を結局リストの味方にしてしまつたのであつた。今やこゝにリスト協會が現れる地盤が用意されてゐた。その目的は「全く忘れられてしまひ、或は稀にしか演奏されないうために、聽衆の理解に封鎖されてしまつた音樂上の作品を、先づリストの偉大なる交響的作品から紹介する」といふのであつた。ワイマール大公がその保護者になつたのであるが、この協會はリストの誕生日(一八八五年十月廿二日)に公けに結成された。會長には萬場一致マルティン・クラウゼが推されたが、この人は當時ライブチヒ日報の編輯をしてゐた人である。彼は屢々ワイマールに客となつてゐた。そしてリストから好感を持たれてゐた。幹事には多くのピアニストがゐたが、その中にはシロタイ、フリードハイム、シュターフェンハーゲンがあり、批評家にはシュターデ博士、B・フォーゲル、フリッチニが居り、ライブチヒの二人の劇場樂長であつたニキシユとコーゲルも幹事であつた。一八八六年の一月から五月までの間に、協會は六回の大演奏會を古いゲワントハウスで開催したが、その最後にはファウスト交響樂がニキシユの指揮で演奏された。當夜は指揮者としてのニキシユの名聲に對して礎石を置いたやうなものであつた。リストは一八八六年五月になつて、初めてドイツに歸つて來たので、この協會の演奏會には全然出席することが出来なかつた。(巨匠の死後、協會は七十五回の誕生日を祝ふために、ライブチヒでニキシユ指揮の下に、リスト大演奏會を開催したが、その時にはダンテとファウストの兩交響樂、多くの交響詩、イ長調協奏曲(シュターフェンハーゲン)及び死の踊り(フリードハイム)が演奏された。この祝典は、リスト音樂の最初の眞の勝利を意味したものであつたが、聽衆は以前屢々さうであつたやうに、巨匠がここに居つたといふことではなく、こゝでは彼の作品だけによつて大喝采を惹き起したからであつた。リスト協會がかくも輝かしい成果を収め、彼の努力がかくも有力に實現することが出来たといふことには、就中マルティン・クラウゼが與つて力あるのである。指揮者や獨奏者が無報酬でやつてくれたし、よき助言者かゝるないわけではなかつたために、最初の中は、彼は容易な演奏をすることが出来たが、リストの死後、全協會がかり／＼／＼になつた時、非常に僅かの維持費で彼の課題を残して置くだけの高さに、この協會を保持して行くことに彼獨りで成功したので、彼がこの地位に就いてゐることは全く重要なことであつた。この地位は全く名譽職であり、物質的なものは全然得てゐなかつた。従つてリスト音樂の歴史に於てマルティン・クラウゼは永遠に、名譽職に價するものである)。

一八八五年十月半ば、リストはワイマールを去つて、先づミュンヘンに赴いたが、こゝではコルネリウスのバグダッドの理髮師の上演に出席するためであつた。ヒーム湖畔のストラダルの別荘に彼を訪問しようとしたが、天候が悪かつたので取り止めになつた。その代りリストは數日間イッテル宮のゾフィー・メンテルの所に行つた。インスブルッ

クで、彼はリナ・シユマルハウゼンと一緒に彼の誕生日を祝つたが、そこを通つて二十四日にローマに入つた。弟子として、こゝでは尙アンゾルゲ、ゲレリヒ、シユターフェンハーゲン、ストラダル、トーマンがゐた。リストは今度もティヴォリには行かず、ローマでホテル・アリベルトに泊つてゐた。聖夜を、彼はコイデルの許で過し、クリスマスの日ドイツ藝術家協會で過した。そのためにリストは尙一回、公開の席に現れた。藝術家協會によつて開催されたリスト演奏會(ローマでは最初)で、彼は最後に彼の第十三番の狂詩曲を演奏した。一月二十一日彼はシユターフェンハーゲンを伴つて、この永遠の都を後にしたが、もうこゝへは歸つて來なかつたのである。もう一度彼は、フロレンスに行つたが、こゝにはいつもものやうに立ち寄つた程度であり、ラウソット・ヒルレブランドの許に滞在し、それからヴェニスでマイエンドルフ男爵夫人と落ち合つた後、ベストに戻つて來た。

三月十日、國立音樂學校はリストのために別離の演奏會を開いたが、この時ストラダル(葬送曲)、クリヴァツィー嬢(ドン・カルロス幻想曲)、シユマルハウゼン(第十一番の狂詩曲)が獨奏者として共演した。それからシユターフェンハーゲンは、ルシエルで別離の大宴會を催した。翌日リストは尙、彼の弟子トーマンの演奏會に出席し、それから夜分ウィーンに旅立ち、こゝからリュティヒに赴いた。今や彼の最後の偉大なる凱旋が始まる。この町では、曾て名手として驚くべき名聲を博したことがあつたのだが、今度は作曲家として輝かしい榮譽を擡つた。之は流星が消える前の最後の輝かしい光であつた。この緊張せる名聲の旅行が殆ど七十五歳の老人の力をどんなに、之以上高め、そして彼の最後を急がせたとしても、彼が生命の黄昏時に、尙彼の藝術的努力の勝利と、彼の誹謗された作品の承認を體驗せねばならなかつたといふことは、慈悲深き天の攝理であつた。彼にとつてはそれは、彼がいつも動かさずにさう信じてゐたやうに、彼と彼の作品のためにいつかは來なければならなかつた時代の曙光のやうに思はれた。

リュティヒに於ける成功せるリスト演奏會の後、巨匠は三月二十日にバリーにやつて來た。リストがもう一度彼の最初の勝利の、この町に歸つて來るだらうといふ通知を、バリーの社交界は、既に久しい以前から待望してゐた。當時尙美しい人々が如何なる程度にリストに魅了されてゐたかは、リストの以前の女弟子の次のやうな手紙がよくこれを物語つてゐる。「私の先生よ。オッシアーナは生きてゐる間いつも先生のものです。私は先生をバリーのどの人よりも愛して居ります。最も熱狂せる人々と比べても。ですからどうぞ非常にぶしつけだつた私のこの前の手紙は御許し下さい。……先生、私は先生を非常に愛して居ります。なぜなら他に最もよく知つた人ですら、私がかう云つても別に不思議かりはしないでせう。私は先生を心から愛して居ります。私が——この手紙を速く書かうとしてゐることは御許し下さい。——といふのは私は先生にあらん限りかう呼びかけ度いと思ひます。いらして下さい。いらして下さい。いらして下さい。ですから私はかう書かないわけには行かなかつたのです。私はぼうつとなつて私を恐ろしがらせるが、然しそれは眞實であるこれらの文章をやつと書くやうになつたことは容易にお分りせう。貴方のオッシアーナより。」

この事情を、もつと極端に物語つてゐるところは次の所である。「私の夫は誰よりも勇敢な兵隊であるだけに——今月は彼は勳章を貰ふでせう。——家に歸るのをそんなに早くは要求しないでせう。——彼は今度ダルマチアと、ヘルツェゴヴィナに行き、私はそのために子供をカロクサに置いて參りました。——子供が立派な誰とも肩を比べられるやうな教育を受けるために。——そしてこの時から私は全く自分のよいことを出来るやうな自由の身となります。ですから先生、私は率直に、そして儀式ばらずに御願ひします。——先生のロンドン旅行のお伴として私を連れて行つて下さい。——といふのは先生の家事を見るだけです。先生はこの旅行をなさることは出来ませんか。——先生の召使

の世話だけでは、先生は今度の旅行は御出来になりません。——といふのはこの召使も英語をちつとも話せませんか。——そして先生の御望み次第、私は貴婦人にでも、家庭教師にでも、單に召使にでもなつて——たゞ先生にお伴出来ると同時に、先生の御役に立つことを幸福に存するだけです。——英語を話すことを非常に幸福に存じて居ります。四年以前から私は先生のお伴をし度かつたのです。——とうとうその機會が來ました。——ですから私は先生のお言ひつけに絶対に服従致します。——若し私が先生と御一緒だといふことを、他人に知らせ度くないと御思ひなら——先生の御指定の驛で先生をお待ち致します。——旅行の切符は——私が持ちます。——他人の費用で旅行し度いと思はれ度くありませんから。——先生には私が御一緒に参り度い理由を正しく御分りになりますでせう。

パリイでリストは、オテル・ドゥ・カレーに泊つた。巨匠の次の旅行のお伴をするために、一三日後シュターフェンハーゲンもこゝへやつて來た。

三月二十五日、木曜日にサン・ユースタツシュ寺院でコロヌの指揮の下に、グランのミサ曲が演奏された。入場料は二十フランであつたけれども、一週間前に皆賣切れてしまつた。そして大成功を収め、四月二日に又も繰返して演奏されねばならなかつた。その他尙、コロヌとラムローの指揮の下に、三回の管絃樂演奏會が催されたが、その時には交響詩が演奏された。リストはいつも嵐の如き喝采を受け、新聞も一八六六年の時とは反對に、どこまでも非常に親切な態度を示した。エラーの所で開いた大夜會(約三百人)には、パリイの高貴な人々が全部一緒になり、ここでリストはもう一度自分でピアノを弾いた。榮譽と名聲は、又もや凡ゆる尺度を踏み越える程であつた。リスト狂は、もう一度パリイにその頭を擡げた。人々は結局巨匠に五月八日エリザベートを上演するから、又來てくれることを約束した。リストは承諾した。四月五日にロンドンへの旅行がなされたが、それはリストが彼の弟子であり、而も

忠實なる闘士ワルター・バッヒュに、そこへ行くことを承諾してゐたからである。「ロンドンでは、私共は王侯のやうな歓迎を受けました。」とシュターフェンハーゲンが彼の父に報じてゐる。「ムンカッシー夫人はパリイから一緒にやつて來ました。リンドラー氏(ベヒシュタインの代理店主)とキングストン夫人(デーリー・テレグラフの主筆の娘)は、リストをパリイまで迎ひに來ました。カレーで私達はマッケンジー(ロンドン第一の作曲家であり指揮者)とリトルトン氏(音樂出版者)に會ひました。ドヴァーでは、それにワルター・バッヒュとE・バハが加はり、そのために私共の社交車は満員でした。私達はそこでロンドン郊外のサイデンハム(西端の家)に、リトルトンの所に宿をとりました。私共が到着した晩は大社交(三百五十人)がありました。リストは然し演奏しませんでした。」

ロンドンでは、マッケンジー指揮の下に、エリザベートが満員のセント・ジェームス會館で感激的な成果を収めたので、それは八日後に又も繰返されねばならなくなつた。イギリスの皇太子とその妃殿下が行啓になり、別の日に、リストはヴィクトリア女帝にウィンゾル宮で拜謁を仰せつけられ、彼は三つの小さいピアノ曲を弾いて女帝を喜ばし、そして女帝から彼はE・ベームが作つた彼女の大理石の胸像を賜はつた。それに續いて尙、バッヒュやE・バハ等により、リスト演奏會があつたが、それにもリストは出なければならなかつたためにリストは息をつく暇もない有様であつた。「パリイでの前の二週間と同様、ロンドンでも大變忙しく緊張してゐたので、今日は唯、心からの挨拶だけを皆様に述べます。愛するリナよ」と、四月十三日の切符には書いてあつた。この疲労から幾分でも回復しようとして、リストはロンドンから復活祭の前週、アントワープの彼の友人リネンの所に赴いた。ところが、この月の末約束の通りパリイへ歸らねばならなかつた。パリイでは、リストは彼の最後の滞在の日に、油繪を書き始めた畫家のムンカッシーの高貴な家に泊つた。エリザベートは七千人も入るトロカデロ會館で、コロヌの指揮の下に大成功を収めた。リスト

は不快のため、その後數日間寝てゐなければならなかつた。「私は外套をうつかりして忘れたために、ひどく風邪を引いてしまつたので、私のパリ滞在の後の四日間、床に寝てゐなければならなかつた。昨晚私がこゝに着いたが、後數日寝てゐなければなりません。私は疲れてゐて、餘り書き度くありません。最愛のリナよ、さようなら」と、リナがワイマールへ歸つた日(五月十八日)にリストは書いてゐる。

リストは非常に疲勞した。そこで最初の日直ぐ、彼の娘のゴジマを電報で呼び寄せた。リストが彼女にワーグナーの死後會つたのは、之が最初であつた。そして彼女の訪問は、一八八四年の夏の經驗によつて、餘り面白く思つてゐなかつた父に、又バイロイトに来て貰ひ、又もや巨匠が旅行して歩いたことによつて、今彼を廻る魅力が廣まつたので、彼が来てくれれば、今年も再び祝典劇の光輝を尙更高めることが出来るのであるから、このことを決定しようといふ目的を持つてゐたのであつた。そのことをリストは承諾した。リストはリナ・シュマルハウゼンにこんなことを書いてゐる。「娘ゴジマが来て、七月三日にバイロイトで行はれる私の娘ダニエラ・フォン・ビューローとトード氏との結婚式に出席し、七月二十日から八月二十三日のパルシファルとトリスタン上演の全ツイクルスにも出席することを決定しました。多分そこで八月の初めに數週間来て貰ふことになるでせう。それから數日後に、又かういふ手紙を書いた。「私の眼病が悪くなりました。私はもう讀むことが出来ません。だが、かなり澤山の頁を讀まないで済まし度いものです。——大きな文字で濃い赤インキで書いてよこして下さい。出来るならば數週間バイロイトにやつて来て下さい。……半分盲になつたやうにして、この文字を書いてゐます。フランツ・リストより」。そして五月三十一日には、又もかう云つて寄越した。「私は半分以上も盲になつたやうです。最愛のリナよ、六月の末になるとバイロイトへ滞在して貰ひ度いといふ萬一の場合についても、益々書けなくなるでせう」。

巨匠がどうにもならなくなり、殆ど盲人同様になり、世話する者もなくワイマールに行つたこの時にゲレヒが彼の秘書をしてゐた。彼はリストに物を讀んでやつたり、彼の草稿を清書してやり、リストの通信を整理してやつた。つまり彼は同伴者であつた。而もリストは氣持が大きかつたので、それに對して充分の報酬を拂はないことは勿論なかつた。リストの容體が益々悪くなつて行つたので、彼は六月一日にマイエンドルフ男爵夫人と共に、ハルレのフォルクマンの所に行つたが、フォルクマンは水腫と診斷し、彼にキッシンゲンで保養するやうにすゝめた。そして之はバイロイトの祝典劇が終つてからすることにした。マイエンドルフ男爵夫人は、八月一日に彼をバイロイトに迎ひに行き、それから自分で彼をキッシンゲンに連れて行かうとした。彼の弱まつた健康状態にもかゝらず、リストは信じられない程の勢力を以て、ゾンデルスハウゼンの音楽家總會(六月三日から六日まで)の全練習と演奏とに出席することになつてしまつた。この總會はリストの意志に反して、「名譽會長の七十六回目の誕生日の前祝ひとして」二つのリスト演奏會を、そのプログラムに入れた。一つは山嶽交響樂、理想、異教徒の戦ひとハムレットであつたが、リストはハムレットをこゝで初めて管絃樂で聞いたのであつた。シロティは死の踊りを演奏し、最後に「ハンガリアの特徴ある人物」が初演されたが、之は「フリードハイムによつてうまく管絃樂化されたものであり、彼の指揮の下にゾンデルスハウゼンで演奏されたのである」第二回目のはオラトリオ・キリストの演奏であつた。リストが泊つてゐたホテル・タンネに集まつた社交的な集會にも彼は出席した。彼の友に對する彼の犠牲心は、自分自身に對する何らの考慮をも知らなかつたもののやうである。

一八八六年七月一日、リストはワイマールを去つて、バイロイトに行き、こゝで彼の孫娘ダニエラの結婚式に参加した。ヘンリー・トードは、以前宮廷庭園で彼に敬意を表したことがあつた。祝典劇が始まる前までは、リストはバ

リで約束したことに従つて、ルクセンブルグのホルバハ宮にムンカツイーを訪れ、暫くの間そこに滞在した。シュタ
ーフェンハーゲンはこの旅行の同伴をした。コルバハでリストは嬉しくも又ハイナルド大僧正にも會つた。リストは
そこで、既に風邪を引いたのであつたが、少しも大事をとらず、そのみならず、彼はもう一度（七月九日）三つの
小曲を以てルクセンブルグで演奏會を催し、友人達に彼の演奏の魔力を味はしめた。七月十二日にコルバハから、彼
はリナ・シユマルハウゼンに宛て、かう報じてゐる。「私の情ない眼は仕事をさせることを拒む。そして情けない、ひ
どい咳は八日以上も前から忌々しい社交をさせてゐる」と。そして二十日には電報でかう知らせた。「明水曜日午後バ
イロイトに行く。そして待つてゐる。リスト。」

三 バイロイトに於ける最後

リストが一八八六年七月二十一日、バイロイトに到着した時、彼は病氣に罹つて居り、ひつきりなしに咳をしてゐ
た。彼は旅行中又もや風邪を引いたのであつた。再び彼は一八八四年の時と同じやうに、フォルストラート・フォン・
フレーリヒ夫人の家に、ミシユカのために一つの部屋と、その他に二つの部屋を借りた。今度は而も、彼は庭に向い
た部屋を借りたが、彼の部屋から階段を降りると庭に出られるやうになつてゐた。巨匠は既にひどく熱があつたので
到着後直ぐ床についた。ところが彼は夜ワーンフリードの夜會に行かねばならなかつた。而も、彼はこの夜の社交を
主なる重心としてゐたらしい。コジマは毎朝六時には彼のところにやつて来て、ワーンフリードから持つて来たコー
ヒーを彼に飲ませた。それから彼女は一日中祝典劇場の方に行つてゐた。「彼女は全く驚くべき精力と意志力とを有つ

てゐる。彼女は今、全くその階上に泊つてゐるのだ」と、リストはリナに話したが、このリナは、リストの電報を
受けてバイロイトに来、今はいつもゲレリヒと一緒に彼の所に滞在してゐたのである。リストは非常に弱つて居り、
ゲレリヒが彼に本を讀んで聞かせると、何遍も居眠りをしてゐたものである。全身にひどくやうな苦しい咳の發作は
彼を急に又この眠りから覺ましてしまふ。「若し、このバイロイトの人々が私の鼻先に居ないのなら、私は寢てゐるの
だ、私はどうも靜かに休んでゐられないのだ」と、彼は悲しげに云つた。朝食にリストは、ハッツフェルド侯爵夫人
の所に行かねばならなかつた。そして午後になると、彼はレスマンやシユターフェンハーゲンやゲレリヒと一緒にトラ
ムプをして遊んだ。それでも彼の手は顫へて、トラムプを正しく區別することが出来なかつた。そして又も居眠りを
するのであつた。夜になると彼は又ワーンフリードの社交界に出かけた。

七月二十三日の金曜日に、リストの容體はよくなかつた。彼はひどく熱があつた。それでも彼は多くの弟子や訪
問客の相手をした。そして四時にはパルシファルの初演に出席した。ワグナー特別棧敷の柱にもたれて、全く衰弱
して疲れ切つて坐つてゐた。そして彼の咳によつて上演の妨げにならぬやうにと、始終ハンケチを口におし當てゝゐ
た。彼がベストでかう云つたのも、尤もであつた。「私はもう決してバイロイトには行き度くない。——よく犬が待ち
構へてゐただから」と。然し、彼が出掛けて行くことによつて、彼の偉大なる友人ワグナーの遺産であるバイロ
イトを、その作者が圖らずも物故したために、困難な危機に遭遇してゐたのであつたが、このバイロイトを護り勵ま
すことになつたので、リストは速かに凡ての不快を忘れ、今や動かない自己犠牲の精神を以て、彼の最後の力をこの
事件に捧げたのであつた。唯彼が、その貴重なる生命を何の躊躇もなく賭けることになるとは、誰も思はなかつたこ
とである。ワグナーがコジマに云つた豫言的な「お前の父は立派な騎士道から死ぬやうなことになる」といふ言葉

が、今や本當になつて來たのである。

土曜日（七月二十四日）、リストの容體には變化がなかつた。彼は又多くの弟子に會つたが、その中には、ヅフィー・メンテルやシロティがゐた。そして、その他にも多くの訪問客に惱まされた。夜には、彼は又ワーンフリードに行つた。日曜日には巨匠は恐ろしく疲れたので、召使に命じて、僅かの人以外には誰も部屋に入れないやうにした。彼は非常に熱が高くなつた。そして殆ど絶えず眠つてゐた。午後、トリストタンの初演があつた。數人の弟子達が、彼をそこへ行かせまいと嘆願したが、彼はこれを拒絶し、「コジマは望んでゐる。俺はそこに行く約束したのだ。」と云つた。痙攣を起しながら上演の始まるまで、棧敷の前面に直立してゐた。彼の波立つた銀の髪は輝いてゐた。そして彼は好奇を以て眺める人々の標的となつた。ところが、あたりが暗くなつた時、彼は棧敷の後方に引き下がり、全く悄沈して坐つたが、覺めてゐるより眠つてゐる方が多く、而も手にはハンケチをしつかりと持つてゐた。幕間にあたりが明るくなると、棧敷の胸壁のところ、盛んに拍手したが、聴衆はそれで非常に興奮した。

翌日リストの容體は非常に悪くなつた。衰弱は益々ひどくなつた。バイロイトの醫師ランドグラーフ博士は、リストに凡てのアルコール飲料を絶対に避けるやうにとの大間違ひを犯した。然し彼の體質は、コニャックや非常に強い刺戟劑に對してよく馴れてゐたので、この突然の禁酒は、却つて不眠に陥らしめ、そのために衰弱は益々ひどくなつた。彼がワーンフリードから貰つてゐた食事も、彼自身の要求や習慣で選擇してはいけないことになつたので、その結果、リストは一日中鑛泉の水以外に、殆ど何もとらないやうなことになつた。彼は、かうなつては餘りに衰へて上演に出席することなどは、とても出来なくなつた。ワーグナーの全家族は、祝典劇場の岡の上に居つた。そしてゲレリヒも病氣たつたし、ミシユカは時々出掛けたので、可哀相な巨匠は誰の看護も受けることなく、死の豫感を抱きながら、全く獨りで家に居つた。リナが、リストの許を訪れることを、人々は「彼方では」餘り喜んで見てゐなかつたのであるが、このリナは皆が祝典劇場の方へ行つてゐた時、こつそりと彼の所にやつて來て、眞夜中まで彼と一緒にゐてくれた。「私はこゝから又も起されるとは思ひません。私は全然、醫者と澤山の藥を信用することが出来ません。醫者はもうよくなりますといふが、自分では日一日と衰弱して行くやうに感じます。みんなが、私の鼻先にゐるのに何故私は丁度この時、こゝで病氣してゐなければならなかつたのでせうか。……どうも嫌なことだ。」と、リストは云つた。

リナが、次の朝（七月二十一日、火曜）七時に、再び彼のところにやつて來た時、彼は死の悲しみにあるやうに見える、彼の頭を振つて言譯をするやうな風に「もうよくなるのだ。」といつた。夜は彼獨りにとつて、恐ろしく長かつたこと、そして一晩中、一睡もしなかつたと彼は訴へた。それまで唯、彼の看護だけをやる人は誰もゐなかつた。さうしてゐると、間もなくコジマが見舞にやつて來た。そして出て行く時、誰もリストの所へ入れないやうにと命令して行つた。リストは暫くの間起き上つたが、間もなく疲勞を感じ、再び横になつた。彼はもう床を離れることは出来なくなつた。夜通して彼は再び獨りで熱病に伏してゐた。ワーンフリードでは大夜會があつたので、誰も彼を見舞ふことが出来なかつた。水曜日には、フライシャー博士がエルランゲンから來て、重い肺炎に罹つてゐることを確め、安靜にして置く必要があると云つた。そのためにリストの部屋には、誰も絶対に入れられなくなつた。控へ部屋にはシュターフェンハーゲンが居つた。そしてコジマは監督のために、日に何遍もやつて來た。リナも又依然よく巨匠の世話をし、彼の性質や習慣をよく知つてゐたアデルハイド・フォン・ショルンも矢張り絶対に入れなかつた。ワーグナー夫人は、彼女の娘達とだけ看護を引き受けようとした。コジマも、その時から彼女の父の隣の部屋に寢た。ところが

彼女は一日中祝典劇の指導をしたり、ワーンフリードの訪問客の接待をしたり、夜になると、夜會に出なければならぬので、リストは大概は獨りで悲しい氣持になつたり、熱にうかされたりして寢てゐた。金曜日には、リストは殆どひつきりなしに讒語を云ふやうになつた。彼が一度目を覺ますと、病人などには無頓着な召使があるだけであつた。シユタールとメリアン夫人の、この姉妹はミシユカの許しを受けて一寸の間、巨匠の病室に入つた。ところが、彼は二人をもう分らなかつた。彼は全く瘦せ衰へ、彼の身體はひどく寒けがし、呼吸する毎に咽喉がごろ／＼と鳴つた。突然、彼は目を覺まして「何時ですか」と靜かに云つた。「九時です。リスト様」とミシユカは答へた。「今日は非常に具合が悪い。今日は木曜日ですか。」ミシユカは愚かにも「いえ、金曜日です。」と答へた。リストは枕に顔をあてて「お！ 金曜日か」と悲しさうに云つた。即ち彼は非常に信仰が厚かつたので、金曜日には何も始めなかつた。彼はその日は不幸の日だといつても云つてゐた。一八八六年の初めに、彼は既にこんなことを云つたことがある。「今年が私が死ぬ年だ。それは金曜日を以て始まつてゐる。そして私の誕生日も、丁度金曜日になつてゐる」と。夜の十二時十五分前に、ランドグラーフ博士がやつて來た。そしてワグナー夫人を待つてゐた。彼女は十二時になつて、初めて祝典劇場から歸つて來た。ミシユカは一晚中リストの床に看護してゐることになつた。間もなくリストは寢込んだ。夜中の二時頃、彼は突然、狂人のやうにベッドから跳び起きて騒ぎ立てた。それは丁度、牡牛のやうな聲であつた。あたりの人は皆それを聞いた。彼は又心を落着けて「空氣だ、空氣だ」と叫んだ。醫者が呼ばれた。巨匠は非常な力を得た。そして彼をベッドに引き戻したミシユカを、自分で烈しく突いた。遂に醫者が約四十五分後に來た時には、リストはベッドに横臥し、死人のやうに冷たくなつてゐた。彼は苦痛のために興奮したのであつた。醫者は彼を、初めは死んだのかと思つた。暫らく摩擦した後、初めて又生命が彼に返つて來たが、意識はもう回復しなかつた。

土曜日の午前、フライシャー博士（エルランゲン）に電報をかけた。コジマは一日中そこに居つた。そして次の晩は、彼女の父の床についてゐた。フライシャー博士は、最も強い葡萄酒とシャンパンを處方の中に入れた。リストは殆ど一壺のコンヤックを毎日嗜んでゐたのに、今までは要求しても、いつも容れられなかつたものである。そして醫者は臨終が間もないと宣告した。若しリストが、この夜生き通したとしたら奇蹟であつた。家の二階にはゲレリヒ、シロテイ、タヤス及びその他のリストの弟子達が、この晩の事件を氣づかつて、フレイリヒ夫人の所に居つた。フライシャー博士は、ベッドの側に立つて、リストの脈をひつきりなしに診てゐた。その側にはランドグラーフ博士が居た。十時半までリストは高く呻つてゐた。一度、彼は未だはつきりと「トリスタン」と云つた。十時半からは彼は全く靜かになつたが、彼の呼吸は激しくなつた。二人の醫者は、銀製の燭臺を有つてベッドの上に坐り、心配さうに段々弱くなつて行く呼吸を診てゐた。その後、間もなくリストは心臓の所に二本の注射を受けた。彼の全身が激しくふるへた。三度び彼の上體が上下へ動いたが、それから彼の手をベッドに横へた。醫者はもう一度、彼の上に身を屈めたが、こつそり二言三言、コジマ夫人に囁いて部屋を出てしまつた。コジマは、ベッドに跪いた。——彼の惱みの最後は來たのだ。——十一時十五分、彼の高貴なる心臓の鼓動は止んでしまつた。リストは僧侶であつたけれども、彼は終油の秘蹟が施されなかつた。

死んだ部屋は、黒い布で覆はれ、リストの首の所にはワグナーの胸像と銀製の燭臺が置かれた。それから寫眞が撮られ、ヨウコフスキーが來てデスマスクがとられた。暫くしてからカトリックの僧侶が現れ、家族の者とそこに居合せた弟子達のために、さゝやかな弔ひの式が催された。一時まで、死體は一般の人に會はせられるやうになつてゐたが、それからは部屋は閉ぢられ、弟子達も彼等の先生の死顔を見ることは出来なくなつた。

八月一日、後にフリードリヒ三世陛下となつたドイツ國の皇太子がバイロイトに來られた。バイロイトの町は、その祝ひのために飾られた。祝典劇は進行した。ワーグナーの家族も上演には出席した。「ツーム・フロージン」料亭に於ける、祝典劇に参加した凡ての人によつて行はれた大宴會は、今年もワーグナー夫人臨席の下に催された。その間リストの音楽はバイロイトでは全然響かなかつた。リストの努力は尊きものとせられなかつた。而も一部分、この町の成長は、彼に負ふ所があつたのであるが、このワーグナーの町に葬られたことも尊きものとせられなかつた。ワーグナーの太陽の側らに、リストにとつては何らの席もなかつた。リストの友人達は、當時の事情を非常に面白くなく思つた。ウィットゲンシュタイン侯爵夫人の手紙の中には、少し後になつてこんなことが述べられてゐる。「私は七月二十八日から八月十四日までのバイロイト新聞を送つて貰ひました。一度だつてリストの病氣のことが書かれてはなから御覽なさい。温泉場では客に不快の念を起させまいとして、そしてそこで病氣したり、死んだりしたことは隠して置くのだが、丁度そのやうな風です。八月二日の新聞を御送りしますが、その中に全く出し抜けに——彼の死が報ぜられてゐるのです。それから彼はカトリック信者だつたことを人々は隠してゐます。讀む人は誰でも彼がこの無神者の眞屈で、何處かの自由信仰主義のプロテスタントの牧師によつて埋葬されたことが分ります。——八月十一日の新聞によると、三年間も會はなかつた彼女自身の父のことはうちやらかして(ワーグナーの死後)、十日後にもツーム・フロージン料亭にゐたとはどうしたことせう。最後の二晩は、人々は劇場にゐました。といふのは、上演が中断されてはいけなからです。そしてゴジマは舞臺監督の役をしてゐたので、晝も夜も劇場に泊つてゐたのです。」

リストの死んだ部屋は、次の日も閉されたまゝであつた。然し天候が暑かつたために屍體の解體が速かに進み、他の住居人達が不平を云つたので、フリーリヒ夫人は、屍體を棺の中に入れるやうにと要求した。人々はそれでワーグナー

フリードへ持つて行つたらよいと云つた。ワーグナー夫人は、自分でその部屋に行き、リストのもの全部を籠に入れてワーグナーに持つて行き、彼女の召使であるシュナツパウフと一緒に屍體を、速かに用意された褐色の棺の中に入れて、シュナツパウフとミシユカと自分とで、ワーグナーに運んで行つた。こゝで棺は今や大きな玄關の中に立派に安置された。

八月三日午前、屍體は市の僧侶カルツェンドルフアーにより、ワーグナーで祝福された。その後葬式が執り行はれた。先づ二人の葬式傳令者、續いて消防隊、基督磔刑の像、會堂管理人、バイロイトのカトリック僧侶、最後に屋根のない花で飾られた靈柩車が並んだ。棺布を持つた人はモットル、ローエン、ミハロウィツチュであつた。それと相並んで松明を持つた弟子達が歩いて行つたが、彼等は先生の棺を引く事を斷られたのであつた。バイロイトの市民達がこの榮譽ある仕事を實行したからである。靈柩車の後には、ジグフリード・ワーグナー、トード博士、商業顧問官のグロス及び侍従ウエデルがワイマール大公の代理として並んだ。又ダニエラを連れたワーグナー夫人、ハッツフェルド侯爵夫人及びマイエンドルフ男爵夫人がそれに續いた。墓地では市長のチンカーが弔ひの辭を述べた。彼はトリスタンの中の言葉を引いた。即ち「死に祓められたる首べ、死に祓められたる心」は故人、音楽の巨匠、獻身的な友人ワーグナーものの促進者を廻る悲嘆に感動的な表現を與へたものであつた。そしてバイロイト市の名を以て、立派にリストの墓地を常に守り、神聖なものとして置くといふ約束を行つた。「吾等の許に、安らかに眠れよ。天使が汝の最後の偉大なる音楽を合唱する中に解かれたる靈が、天國に昇つて行くであらう。天使達は、汝を彼岸に導き行くであらう」といふ言葉を以て、市長は月桂冠を置いた。第二の花束を、彼は尙「忠實なるウィーン市」の申出によつて捧げた。それに續いて限りなく花束が捧げられた。

リストの最後の墓場については、はつきりしたことが分らなかつた。バイロイトの人々は、就中ワイマール大公が處置するだらうと考へてゐた。ところが、大公からは唯「リストは何處に、何時埋められるか」といふ問が来ただけであつた。ローエン男爵は、それ以上の知らせが来るのではないかと始終待つてゐたが、リストの女友達であつた大公妃ゾフィーが保養のためガスタインに滞在した時、何も云つて寄越さなかつた。後にワイマール宮廷は故人のために、アルテンブルグに靈廟を建てる計畫をした。然し、この提案に對してワーグナー夫人は反對した。リストの屍をハンガリアに持つて行かうといふ私的な方面から畫てられた請願も同様に拒絶された。ワーグナー夫人は、彼女によつて當時公けにされた二本の手紙に明らかに述べられてゐるやうに、唯二つの條件で、リストの屍を手渡さうとしてゐた。「その一つは、ワイマール大公陛下の要求で、私の父の遺骸を、大公の靈廟に保蔵すること。第二にはハンガリア國民の代表者により兩院で決議されたことに基き、私の父の記念をバイロイトからベストに遺骸を、立派な祭式を以て移すことによつて、榮譽あるものとする」ことであつた。然し兩方の願ひが果されなかつた。大公は大公廟に保蔵することを拒絶したし、ハンガリア國民はリストの「非國民的な」著書ハンガリアに於けるジブシーとその音樂の管することをつまらない氣持から國家がその遺骸を持つて來るのを拒んだ。一八八七年二月二十七日の閣議でベストの文筆家と藝術家協會によつて提出された案が、リストを「普通の喜劇役者」だと呼んでゐた當時の總理大臣ティッサの反對を受けて拒否されてしまつた。そしてアブラニーと、後にハイナルドによつて私的な手段から計畫された遺骸を移す試みは、ワーグナー夫人の要求から何もなくなつてしまつた。さうしてゐる間に、又別の方面からリストの遺骸をどうかしようといふ考へが起つた。周知の通り、リストがその教團に屬してゐたフランツィスカン教團は、その團則によつて屍體を自分達のものとして要求した。一八六〇年のリスト遺言狀によつて相續人とされ、遺言の執行人

とされたウイットゲンシュタイン侯爵夫人は、傳記的なものから集成した、大きな著書を作つてゐたが、彼女がリストの思ふ通りのことを示すことが出来る唯一の人だと云つて、この請願を支持した。或る経過にまで成長しようとしてゐたこの争ひ事も、侯爵夫人の死によつて駄目になつてしまつたのであるが、侯爵夫人は既に一八八七年三月七日に彼女の偉大なる友リストに従つて物故したのである。二十四卷より成る彼女の宗教的大著「教會の外部的弱點の内的原因」(Des causes intérieures de la faiblesse extérieure de l'Eglise)は、彼女の死ぬ二三日前に完成した。ローマに於ける聖ペーテル寺院のドイツ墓地に彼女は葬られた。リストの鎮魂曲は、彼女の最後の同伴となつた。彼女の娘であるウイーンのホーエンローエ侯爵夫人が、彼女の母の後を繼いだ。リストの死後、間もなくワイマールの大公は「新しいドイツ音樂の方向を促進するために、全ドイツ音樂協會のリスト財團」の考へを起した。ホーエンローエ侯爵夫人は、この目的のために七萬マルクといふ巨額の金を寄附し、そしてリストが遺したもの及び彼女の母が所有してゐたリストの遺物を集め、又リストが他の方法で處分しないものは全部集めて、リスト博物館を造るやうにと申出た。大公は、それでリストが住んでゐた宮庭庭園の家をそのまま、永久にそれに當てた。

かくてリストの墓地はバイロイトとなつてしまつた。彼の孫のジグフリード・ワーグナーの提議に従ひ、この町は市立墓地の中に小さい靈廟を建てた。彼が正にバイロイトに眠つてゐるといふことは、彼の苦惱と努力の數々の出來事を考へると、多くの人々に痛ましい感じを抱かせるかも知れないが、他面から考へると、リストが正にこゝを、これまでの憩ひの場所としたことは、又運命の美しい攝理でもある。といふのは、この場所は彼が生涯戦ひ求め、憧れてゐた藝術的な理想がしつかりした形をとつた所であるからであり、この町は、彼にとつては正に彼が彼の作品によつて共に可能ならしめたし、共に用意せんとしたところの、久しく憧れてゐた故郷となつたからである。勝利に達

Wittgenstein, Carolyne Sayn (ウイットゲンシュタイン) 48, 151, 158-169,
177, 189, 190, 192, 214, 219, 220, 235-236, 243, 249, 250-252, 261-
262, 265, 266, 267, 270, 292, 293, 296, 298, 300, 321-329, 338, 362,
365, 369, 372, 375, 381, 384, 387, 394, 396-397, 402-403, 404, 413,
434, 437

Zellner (ツェルナー) 255

Ziegesar, von (ツィーゲザール) 162, 195

Zichy, Géza, Graf (ツィヒー伯) 351, 370, 399, 416

したけれども、然し又誤解と苦惱から免れなかつた生涯から解かれて、彼は今やこゝに安らかに眠つてゐるのだ。彼は自分のことは何も考へず、常に他人のために生き、且つ戦つたのであり、他人を勵まし、且つ守つたのであつたと同様に、彼は又偉大なる事件に奉仕して死んだのであつた。リストの中にはキリストの靈の要素が含まれてゐた。嫉妬することもなく、彼の敵に對して憎惡の念を抱くこともなく、非常なる誠實の心に充ち、絶えず唯、他人のことを考へ、名狀すべからざる、殆ど恐るべき程の善良さを有つた、彼の如き一切を捧げることの出来る人間は、他にはなかつたのである。

Raff (ラッフ) 144, 166, 178, 183, 189, 190, 191, 196, 205, 227, 232, 358
 Raiding (ライディング) 5-9, 97, 147, 399
 Rappoldi-Kahrer, L. (ラポルディ・カーレル) 155
 Reicha, A. (ライヒャ) 25
 Reisenaner, A. (ライゼナウアー) 393, 394, 411
 Rellstab, L. (レルシュタッフ) 117, 145
 Remenyi (ルメニー) 221, 339, 359, 365
 Rimmert, Martha (レムメルト) 376, 411
 Reubke, J. (ロイブケ) 196, 272
 Richter, Hans (リヒター) 362, 366, 378
 Riedel, K. (リーデル) 295, 335, 363
 Rietschel, (リーチェル) 230-231, 263
 Ronchaud, L. (ロンショウ) 73, 139
 Roquette, O. (ロクェット) 270
 Rosenthal, M. (ローゼンター) 416
 Roth, Bertrand (ロート) 393
 Rubinstein, A. (ルビンシュタイン) 225, 289, 241, 261, 270, 360, 369, 406-407, 419
 Saëns, St. (サン・サーンス) 364, 388
 Salieri (サリエリ) 11
 Sand, George (サンド) 46-47, 70, 71, 82, 102, 125, 308
 Sauer, E. (ザウアー) 416
 Scheffel, J. V. (シェッフェル) 376
 Schmalhausen, Lina (シュマルハウゼン) 393, 394, 398, 410, 416, 417, 418, 421, 429
 Schorn, Adelheid von (ショルン) 371, 384, 417
 Schubert (シュベールト) 71, 73, 100, 163, 223, 305
 Schumann, Robert (ローベルト・シューマン) 70, 98-101, 164-165, 176, 177, 194, 201-203, 221, 233, 299
 Schumann, Clara (クララ・シューマン) 98-101, 164-165, 194, 201-203, 225, 233
 Schwarz, Max (シュワルツ) 393
 Seifriz, M. (ザイフリッツ) 271, 335

Sgambati (スガムバチ) 343, 403
 Siloti, Al. (シロティー) 411, 413, 415, 420, 430
 Singer, Ed. (ジンガー) 227, 241, 243
 Sobolewski (ソボレフスキー) 273
 Spohr (シュポア) 145
 Stahr, Ad. (シュタール) 180, 367
 Stahr, Geschwister (シュタール) 356, 432
 Stavenhagen, B. (シュターフェンハーゲン) 354-355, 420, 422, 425, 428, 429, 432
 Stradal, A. (シュトラダール) 417, 420, 421
 Street-Klindworth, Agnes (ストリート・クリンド・ウォルト) 335
 Stör (シュテール) 196, 227, 268
 Taborsky (タボルスキー) 410, 417
 Tausig, K. (タウジヒ) 154-155, 166, 196, 236-237, 243, 268, 271, 309, 360, 364, 366, 371
 Thalberg (タールベルグ) 57, 63-69, 81, 105, 109-110, 124
 Tilgner, V. (ティルグネル) 415
 Tichatscheck (ティヒャチェック) 136, 172
 Timanoff, Vera (ティマノフ) 393
 Uhlig, Th. (ウーリヒ) 183, 188, 258
 Urspruch, A. (ウルシュプルッフ) 370
 Vieuxtemps (ヴュータン) 223
 Volkmann, Robert (フォルクマン) 338, 385
 Wagner, Richard (ワーグナー) 102-103, 130-131, 136, 164, 171-175, 181-189, 202, 208, 210-218, 218-220, 239-242, 249-252, 265, 272, 281, 282-292, 301, 306-307, 309, 310, 311, 385, 346-347, 361, 364, 371-372, 374-375, 376, 383, 386, 390, 397, 404-405, 407-410, 430
 Weingartner (ワインガルトナー) 353-354, 404, 414
 Weissheimer, W. (ワイスマイマー) 305, 309, 311
 Winterberger, Al. (ウィンターベルガー) 196, 237
 Witt, Dr. (ウィット博士) 367

マールリングの鐘 381
 ストラスブルグの鐘 381, 383, 395
 アヴェ・マリア 223, 241, 339
 グランのミサ曲 232-233, 247-249, 269, 270, 295, 340, 342, 370, 392,
 400, 425
 戴冠式ミサ曲 339, 342-344, 361
 合唱ミサ曲 330
 鎮魂曲 347
 十三番プサルム 233, 241, 298, 335, 338, 341, 348
 二十三番プサルム 297, 345
 百三十七番プサルム 297
 オルガンのためのミサ曲 394
 ヴィア・クルツィス 389, 392
 聖エリザベート 270, 298, 329, 330, 338, 339, 344, 345, 346, 360, 383,
 389, 403, 411, 415, 425, 426
 キリスト 253, 330, 333, 340, 342, 344, 365, 369, 370, 376, 378, 383,
 400, 403, 428
 聖スタニスラウス 361, 381, 384, 387, 409, 415

文 筆

ショパン 132, 193, 319
 指揮に就て 216-217
 ワーグナー論 175, 184, 318
 ゲーテ財團 178-180
 ハロルド交響樂 193, 319
 ローベルト・シューマン 202, 319
 演劇論 222, 318
 藝術家に就て 317
 ジプシー 133, 147, 297, 319
 Loën, von (ローエン) 359, 380, 435
 Löwy, S. (レーウィー) 148, 256

Ludwig II. von Bayern (バイエルン王ルドルフ二世) 340
 Lutter, H. (ルッター) 393, 404, 411
 Maria Paulowna, Grossherzogin von Weimar (ワイマール大公妃, マ
 リア・パウロフナ) 114-115, 117, 127, 174, 225, 296, 321
 Mendelssohn (メンデルスゾーン) 45, 98-102, 119-120
 Menter, Sophie (メンテル) 360, 365, 369, 380, 416, 421, 430
 Merian-Genast, E. (メリアン・ゲナスト) 253, 266, 311, 432
 Meyendorff, Olga von (マイエンドルフ) 333, 356, 373-374, 400, 407,
 412, 413, 414, 422, 427, 436
 Meyerbeer (マイヤーベール) 45, 106, 145, 164, 189, 191, 215
 Milde, F. von (ミルデ) 163, 204, 267, 376
 —Agthe, El (ミルデ・アグテ) 163, 257, 267, 271, 274, 276
 Montez, Lola (モンテ) 137, 139, 390
 Motta, Vianna da (モッタ)
 Mottl (モットル) 199, 392, 419, 435
 Moukhanoff, von (モウクハノフ) 132, 150, 335, 371, 384
 Mozart (モーツァルト) 242, 268
 Munkácsy, M. von (ムンカツィー) 404, 425, 428
 Nikisch (ニキシュ) 401, 421
 Nohl, L. (ノール) 376
 Nonnen werth (ノンネンウェトル) 110-113, 127, 133
 Ohe, Adele aus der (オーエの貴族) 411
 Ollivier, E. (オリヴィエ) 262, 307, 309, 315, 336, 341, 345
 d'Ortigue (ドルティエグ) 86, 340
 Paganini (パガニーニ) 36-38
 Pohl, R. (ポール) 182, 217, 218, 227, 232, 256, 289
 Posse, W. (ポッセ) 412-413
 Preller, Fr. (プレラー) 237
 Pressburg (プレスブルグ) 8, 14, 93, 96, 376, 378, 380, 399, 404, 415,
 418, 419
 Pruckner (プルックナー) 196, 201, 227, 233, 239

ローマの計畫の失敗	349	宮廷庭園	350-359
ワイマールのベートーヴェン祭	362-364	ベスト	365-366
リストとローベルト・フランツ	367	ヤーナー伯爵夫人	367-369
ワーグナーとの和解	371-375	第五十回音楽家總會	377-379
ベストに於けるワーグナー演奏會	383		
リストとビューロー	384-385	バイロイトの祝典劇	386-387
リストとマイエンドルフ男爵夫人	405		
ワーグナーとの最後の生活	407-409	ワーグナーの死	409
「砂洲」ベスト	416-419	リスト協會	420
最後の勝利	422-426	バイロイトの最後	429-435
埋葬	435-436	リスト財團と博物館	437

作 品

スポサリツィオ	86
協奏練習曲	75
イ短調ピアノ協奏曲	28
タントウム・エルゴ	28
ダンテソナタ	74
巡禮の曆	87, 221, 389
ピアノ物語	339, 342, 345
ハンガリア狂詩曲	147, 221, 268, 376, 418
愛の頌歌	161, 339, 388
ヴォロニンス民謡集	161
ロ短調ソナタ	221, 335, 399
變ホ長調協奏曲	231, 241, 257, 269, 271, 360, 400, 406
イ長調協奏曲	245, 269, 366
デステ別荘の絲杉に寄せて	389
死の踊り	400
悲しみのゴンドラ	409
夢みつつ	418
プロメトイス	182, 237, 256, 267, 305
祝典樂	226, 257, 271, 293, 321, 335, 399

理想	263, 268, 293, 305, 395, 414, 428
異教徒の戦	87, 253, 338, 428
ハムレット	259, 428
ハンガリア	361, 366, 391
マゼッパ	106, 161, 223, 245, 254, 293, 305
山嶽交響樂	345, 360, 401, 428
オルフォイス	222, 237, 244-245, 252
レ・プレリュード	222, 241, 252, 254, 255, 271, 299, 342, 360, 399
タッソー	223, 241, 269, 271, 294, 340, 400
ダンテ交響樂	233, 267, 268, 338, 340, 361, 388, 420
ファウスト交響樂	225, 245-246, 263, 309, 311, 312, 340, 393, 400, 420
メフィストワルツ	335, 340, 394
誓忠行進曲	214
ハンガリアの嵐の行進曲	129
ゲーテ祝典行進曲	176, 299
ビューロー行進曲	414
藝術家に寄す	215, 222, 263
「百年前」	297
ベートーヴェンカンタータ	361, 364
祝典カンタータ	145
ワルトブルグの花嫁歓迎	377
ハンガリア幻想曲	259, 418
ハンガリアの肖像	418
リヒャルド・ワーグナーの墓場	412
ドン・サンショ	20-25
マンフレッド	127
サルダナバル	149, 177
カーマ	270
ヤンコ	269
歌曲	113, 133
ペトラルカのソネット	150
ワイマール民謡	263
ハンガリアの戴冠式の歌	418

Lamennais, Abbé (ラムネー神父) 41-42, 47, 82, 140
 Laprunarède, Comtesse (ラプルナレード伯爵令嬢) 46
 Lassen, Ed. (ラッセン) 256, 268, 406
 Laussot-Hillebrand (ラウソット・ヒルレブランド) 345
 Lenz, W. von (レンツ) 34, 123
 Lessmann, O. (レスマン) 376, 429
 Lichnowsky, F. von (リヒノフスキー) 105, 110, 113, 132, 133, 147, 162, 167
 Liebling, Sally (リープリング) 416
 Liszt, Adam (父) (アダム・リスト) 3-28
 —, Anna(母) (アンナ・リスト) 5, 29, 31, 206, 300, 336, 341
 —, Blandine (ブランディーヌ) 56, 140, 219, 235, 262, 315, 331, 336
 —, Cosima (コジマ) 75, 140, 220, 235, 242, 261, 297, 301, 307, 335, 346, 410, 411, 429—
 —, Daniel (ダニエル) 88, 140, 220, 235, 261, 297, 301, 309
 —, Eduard von (エドアルド) 148, 242, 256, 261, 338, 345, 360, 391, 392
 —, Franz (フランツ・リスト)
 祖先 3
 最初の出現 8
 パリーへの演奏旅行 13-16
 ロンドン 19-20
 父の死 27
 初戀 29-31
 バガニーニ 36-38
 ショパン 39
 ジョルジュ・サンド 46-47
 ゲンフにて 53-56
 ノーアム 70-72
 ウィーン 78-84
 ルッカ 90
 ワーグナーとの初対面 102-103
 ワイマールにて 114-115
 生誕及幼年時代 5-7
 ウィーンにて 9-13
 パリー 15-19
 ドン・サンショ 20-25
 少年時代の作品 28
 重大危機 31-36
 ヘルリオーツ 38
 ラムネー神父 41-43
 ダグー伯爵夫人 49-53
 タールベルグとの競演 57, 63-69
 コム湖畔 72-75
 ローマにて 85-90
 ライプツヒの演奏 98-102
 フライマウレルとして 112-113
 ベルリンにて 116-122

リストとヘンセルト 123
 ワイマール 127
 ロシアにて 132-133
 伯爵夫人との龜裂 137-140
 スペインにて 142-144
 ウィットゲンシュタイン侯爵夫人との初対面 151
 リストの演奏 152-157
 シューマンとの龜裂 164-165
 ワイマールに於けるタンホイザー 171-174
 ワーグナーの逃亡 173-175
 ゲーテ財團 178-180
 ワイマールに於けるローエンゲリン 181-185
 ニーベルンゲンの指環 185-188 「未來音楽」 188-189
 ワイマールの演奏會 195-196
 ワイマールのベルリオーツ祭 199-201
 リストとシューマン 201-203
 ベーター・コルネリウス 207-208
 ワーグナーへの第一回訪問 210-213
 カールスルーエ音楽祭 214-217
 ホフマン・フォン・フアレルスレーベン 223-225
 新ワイマール協會 227-233
 ベルリンに於けるタンホイザー 239-242
 グランのミサ曲 247-249
 ワーグナーへの第二回訪問 249-252
 下ライン音楽祭 256-258
 ワイマールの状態 262-266
 ワーグナーとの軋轢 282-292
 ライプツヒに於ける音楽家總會 294-295
 侯爵夫人ワイマールを去る 298
 パリーに於けるリスト 306-309
 文筆家としてのリスト 315-320
 ベストに於ける聖エリザベート 338-340
 ハンガリア戴冠式ミサ曲 342-344
 ベルギーにて 124-127
 ベルリンにて 129-131
 ワイマールの指揮者として 135-136
 リストとハイネ 140-142
 ボンのベートーヴェン祭 144-146
 侯爵夫人 158-162
 アルテンブルグ 165-169
 ゲーテ祭 176-177
 バレンシュテット音楽祭 204-206
 リストの暫定的退位 208-210
 指揮者としてのリスト 217-218
 リストと「女友達」 236
 リストの退位 271-281
 ヨアヒムの離叛 258-261
 リストの遺言狀 299-301
 ワイマールの別離 311-315
 リストと侯爵夫人 321-329
 ワルトブルグ祭 346

ワイマール大公) 127, 208-210, 213, 264-266, 336, 356, 420, 436-437
Chélarde (シェラル) 146, 162, 163, 190, 276-281, 303-306, 323
Chopin (ショパン) 39-41, 125, 132-133, 319
Chorley (コーレー) 145
Cornelius (コルネリウス) 166, 196, 207-208, 218, 227, 231, 232, 361, 263,
272-275, 309, 312-313, 345, 381, 389, 421
Cossmann (コスマン) 191, 196, 227, 243
Criq, Caroline St. (聖カロリーヌ・クリ) 29-31, 142-143
Czerny (ツェルニー) 9-13, 19, 21, 69
Damrosch, L. (ダムロッシュ) 294, 345
David, F. (ダヴィッド) 254, 295
Dingelstedt, Fr. von (ディンゲルシュテット) 177, 183, 263-265, 266, 274-
276, 281, 282, 296, 297, 359, 390, 397
Draeseke (ドレーセケ) 154, 188, 196, 309, 311
Eberwein (エーベルワイン) 163, 196
Erkel (エルケル) 338, 385, 418
Esterhazy, Fürst (エステルハツィー侯) 3—
Fay, A. (ファイ) 156, 373, 376
Festetice, Graf (フェステティックス伯) 93-95, 247
Fétis (フェティス) 57, 104, 126, 145
Fichtner-Erdmannsdorfer, P. (フィヒトネル・エルドマンズデルフェル) 357,
370, 379
Franz, Robert (フランツ) 136, 206, 233, 367, 375
Friedheim, A. (フリードハイム) 393, 411, 415, 420, 428
Genast, Ed. (ゲナスト) 114, 163, 172, 182, 190, 195, 227, 237
Gille (ギルレ) 115, 233, 357
Gluck (グルック) 222, 267
Göllerich (ゲレリヒ) 422, 427, 429, 430
Gottschalg, A. W. (ゴットシャルク) 233-234, 237
Grétry (グレトリー) 124, 126, 315
Grosse (グロッセ) 272

Gutzkow (グツコフ) 183, 359
Hagn, Ch. (ハゲン) 122
Hanslick (ハンスリック) 189, 255, 369, 399
Haynald, Cardinal (ハイナルド大僧正) 249, 335, 365, 370, 377, 437
Hebbel (ヘッベル) 273, 301
Heine, H. (ハイネ) 140-142
Henselt, A. (ヘンセルト) 81, 123
Herbeck, J. (ヘルベック) 242, 263, 360
Herwegh (ハーウェー) 109, 211, 213, 261
Hiller, F. (ヒルラー) 46, 100, 124, 146, 231, 233, 257
Hoffmann von Fallersleben (ホフマン・フォン・ファレルスレーベン) 180,
223-225, 227-230, 299
Hohenlohe, C. Fürst (ホーエンローエ侯) 293, 296
Hohenlohe, G. Kardinal (ホーエンローエ大僧正) 323, 334, 337, 342, 394
Hugo, Victor (ユゴー) 45, 391
Hummel, N. (フムメル) 4, 9, 11, 114, 136
Janin, J. (ヤニン) 54, 125, 145
Janina, Gräfin (ヤニーナ伯爵夫人) 367-369
Ingres, D. (アングレ) 87
Joachim (ヨアヒム) 147, 191, 196, 201, 208, 215, 218, 219, 221, 241,
258-261, 395
Kastner, Emerich (カストネル) 370
Kaulbach, W. von (カウルバハ) 134-135, 253
Keudell, von (コイデル) 382
Klindworth (クリンドウォルト) 196, 201, 221
Koehler, L. (ケーラー) 188, 295
Konstantin von Hohenzolle-Hechingen (コンスタンティン・フォン・
ホーエンツォーレルン・ヘッヒンゲン) 135, 270-271, 294, 313, 336
Kriehuber (クリーフーバー) 84
Krause, Martin (クラウゼ) 420
Lamartine (ラマルティエヌ) 73-74, 146

1886 エルンスト・マツハ著「感
覺の分析」

較音楽學の形成に貢獻す
ブラームスの第四交響曲初演 (マイニン
ゲン)
ヨーハン・シュトラウスの「ジプシー男爵」
初演(ウィーン)
サリヴァンの「みかど」初演(ロンドン)
フランツ・リストの死(パイロイト)
樂器製造の進歩
音楽出版の隆盛 (ドイツ, イギリス, イ
タリア, ロシア)
ライブチツヒで「ポケット用總譜」出版開
始 (1892年以後, オイレンブルグ版と
なる)
ヘルマン・クレッチュマール著「演奏會案
内」第一巻現る

索引

- Abrányi, C. (アブラニー) 343, 376, 377, 385, 409, 418, 437
Abt, Franz (アプト) 237, 393
d'Agoult, Gräfin (ダグー伯爵夫人) 47, 49-53, 55, 59, 70-77, 84-91, 93,
102, 108, 110, 114, 127, 133, 137-142, 307-309, 341, 369
d'Albert, Eugen (ダルベール) 404, 406, 410, 411, 415
Ambros, W. (アムブロス) 295
Andrassy (アンドラシー) 365, 370, 375
Ansorge, C. (アンゾルゲ) 420
Arnim, B. (アルニム) 122
Angusz, A. von (アウグスツ) 94, 247, 269, 338, 361, 364, 365, 366, 398
Batka, J. (バトカ) 415
Belloni (ベルローニ) 105, 158
Berlioz (ベルリオーツ) 38, 47, 58, 90, 102, 106-107, 145, 147, 193, 199-
201, 221, 222, 223, 231, 243, 257, 267, 272, 307, 340
Beethoven (ベートーヴェン) 6, 12, 107, 144-146, 257, 275, 343, 355, 363-
364, 376, 383
Bösendorfer (ベーゼンドルフェル) 379
Brahms (ブラームス) 221, 260, 370
Brendel, Fr. (ブレンデル) 188, 199, 212, 294, 295, 305, 306, 329, 334,
363, 386
Brousart, Hans von (ブロンスアルト) 153, 196, 207, 221, 227, 254, 360,
383, 388, 390
Bülów, Hans von (ビューロー) 136, 166, 177, 183, 188, 195, 196, 197-
198, 199, 201, 204, 205, 214, 215, 218, 241, 242, 257, 258, 262, 267,
271, 272, 289, 292-293, 306, 310, 311, 314, 334, 335, 338, 339, 341,
346-347, 361, 362, 367, 382, 384-385, 387, 390, 393, 396, 398, 400,
401, 414
Carl Alexander, Grossherzog von Weimar (カール・アレキサンダー・

世界郵便聯盟の創立

「出版法」によりドイツ出版物の自由認めらる

- 1875 最初の心理學研究室ドイツに創設(ライプチヒ:ヴントによる)
- リスト:聲樂曲「ストラスブルグの鐘」「マールリンクの鐘」を作曲
ジョルジュ・ビゼーの「カルメン」初演(パリ)
- パリの新歌劇場開設
ハンス・リヒター:ウィーン宮廷歌劇場の樂長となる
フィリップ・シュピッタ:音樂史の教授としてベルリン大學に就職
- 1876 電話の發明
- バイロイトに於ける最初のワーグナー祝典劇(ハンス・リヒター指揮, ニーベルンゲンの指環)
- 1877 蓄音器の發明(エディソン)
- ブラームスの第一及第二交響曲初演(ウィーン:ハンス・リヒター指揮)
ヨゼフ・ラインベルガー:ミュンヘンの宮廷樂長となる(合唱曲, オルガン樂, 管絃樂)
- 1878
- リスト:オルガンのためのミサ曲及第二のメフィストワルツ作曲
ワーグナー:「バルシファル」の詩完成
クララ・シューマン:ラッフ創立にかかる
フランクフルト・アム・マイン音樂學校に現る(古典及浪漫派ピアノ樂の演奏者として改めて勝利獲得)
ベートーヴェンの第九交響曲イタリア初演(ミラノ)
- 1879 イブセン「ノラ」に續いて代表戯曲を書く
- ヨアヒム:ブラームスのヴァイオリン協奏曲初演(ライプチヒ)

グローヴの「音樂及音樂家辭典」(89年まで)

- 1880 ハインリッヒ・トライチュケ著「ドイツ史」第一卷(94年まで)
- ハンス・フォン・ビューロー:宮廷音樂顧問としてマイニンゲンへ
ブルックナー:第四交響曲完成
- 1881 ロシアのアレキサンダー二世薨去
アレキサンダー三世即位(94年まで)
- リスト:全ドイツ音樂協會の名譽會長に推さる
フェリックス・モットル:樂長としてカールスルーエへ
ワーグナーの音樂フランスの作曲へ影響す
- 1882 細菌學の進歩
- リスト:ヴェニスでワーグナーと最後の會談(翌年にかかる)
ワーグナー:「バルシファル」完成, バイロイトで初演
- 1883 ニーチェ「ツァラトゥストラ」に着手(85年)
ウイルヘルム・ディルタイ著「精神科學序説」
ドイツ・オーストリア・イタリアの三國同盟
ドイツの植民政策奏功
ドイツのルーテル祭
- リヒャルト・ワーグナーの死(2月13日, ヴェニス)
全ワーグナー協會成立
ブラームスの第三交響曲初演(ウィーン)
ブルックナーの第七交響曲完成
ロイヤル・カレッジ・オブ・ミュージック開校(ロンドン)
メトロポリタン歌劇場清祓式(ニューヨーク)
カール・シュトムプ著「音響心理學」第一卷
- 1884 ドイツに印象主義起る
- ライプチヒの新ゲワントハウス開設
- 1884 ワイマールにゲーテ協會創立
- シュピッタ, クリサンデル, アードラー「音樂學季刊」創始(1894年まで)
フリードリッヒ・ハウゼッカー著「表出としての音樂」
英國人エリスの論文「各國民の音階」は比

セーヤー著「ベートーヴェン傳」第一卷
現る
ノッテボームのベートーヴェン研究
エッチェンゲン著「二元的發展に於ける和
聲組織」
ハインリッヒ・ベレルマン：A.B.マルクス
の後任としてベルリン大學へ
トーマの「ミニヨン」初演(パリ)
スメタナの「賣られたる花嫁」初演(ブラ
ーグ)

1867 マネーとフランスに於け
る繪畫の印象派
バルナスの詩人達
イブセンの「ペール・ギユ
ント」

リスト：戴冠式ミサ曲完成
リストの娘コジマ・ビューロー：ワーグナ
ーの許へ走る
ワーグナー：「名歌手」の作曲完成
ハンス・フォン・ビューロー：宮廷樂長及音
樂學校長としてミュンヘンへ
ブルックナー：宮廷寺院オルガニスト及
對位法教師としてウィーンに就職
ヨーハン・シュトラウス(息子)の圓舞曲
「美しき青きドナウ」
ゲーノーの「ロメオとジュリエット」初演
(パリ)
コペンハーゲンに音樂學校開校

1860 ヘルマン・ロツツェ著「ド
イツ美學史」
アドルフ・ゾンネンター
ル及ウォルター：ウィー
ンのブルグ劇場で活躍

「名歌手」の初演(ミュンヘン、ハンス・
フォン・ビューロー指揮)
ブラームスの「ドイツ鎮魂曲」初演(ブレ
ーメン)
ブルックナーの第一交響曲初演(リンツ)
ロッシーニの死
全ドイツチェチリア協會の創立
クリザンデル：「一般音樂新聞」の監督者
となる

1869 フリードリッヒ・ニーチ
エ：パーゼル大學の教
授となる
ヴァチカンの會議

1870 獨佛戰爭(71年まで)
フランス共和國

1871 新ドイツ帝國の建設
ウィルヘルム一世
ビスマルク最初の宰相

1872 ドイツに所謂文化戰始ま
る(79年まで)
ストラスブルグ大學開校
哲學者クーノー・フィッ
シャー：ハイデルベルグ
へ

1873

1874 ザントの「生理學的・心理
學綱要」

エクトール・ベルリオーズの死
ワーグナーとコジマ・フォン・ビューロー
との結婚
ヨゼフ・ヨアヒムの下にベルリン王立音
樂學校開校
ハンス・フィツナー生る

リスト：ブダペストのベートーヴェン祭
に出席
ワーグナー著「ベートーヴェン」
「ワルキューレ」の初演(ミュンヘン)
ドイツ軍隊行進曲の隆昌

ワーグナー：「ジークフリード」の作曲完
成
マックス・フォン・エルドマン・スデルフェル
の指揮の下にゾンデルスハウゼンの
「ローコンチェルト」
タールベルグの死
ヴェルディの「アイーダ」初演(カイロ)

ワーグナー：バイロイトへ移住
ワーグナー：祝典劇場の起工

リストのオラトリオ「キリスト」初めて完
全にワイマールで演奏
リスト記念祝賀ベストで行はる
シュピッターのバハ傳第一卷現る(二卷1880
年)

ワーグナー：「神々の黄昏」の總譜完成
ペーター・コルネリウスの死

マゲンタとソルフェリノ
でフランス軍オースト
リア軍に勝つ

1860 グスタフ・テオドル・フェ
ヒネル著「精神物理学」
(実験心理学の創始)
ショーペンハウエルの死
ヤコブ：ブルックハルト
著「イタリアのルネッ
サンス文化」
日本藝術ヨーロッパに影
響
キルヒホーフとブルゼン
によるスペクトラル分
析の発見

1861 プロシア王・ウィルヘルム
一世即位(88年まで)
ヴィイトル・エマヌエル統
治下(78年まで)にイタ
リア統一国家となる
パリーの歌劇場建設開始
(74年まで)

リスト：息子ダニエル死す(ベルリン)
ワーグナー：ルツェルンで『トリスタン
とイゾルデ』の作曲完成(示導動機技
術の充分なる發展)
「新ドイツ派」音楽の闘争の頂點
ペテルスブルグにロシアの音楽協會創立
ロンドンでヘンデル百年祭(2700人の歌
手と460人の演奏家)
シュポーアの死(カッセル)
ブラームス：ハンノーヴァーで彼のピア
ノ協奏曲=短調を演奏
グーノー「ファウストとマルガレート」初
演(パリ)

ワーグナー：ドイツ歸還
カール・ライネッケ：ゲワントハウス演奏
會の指揮者及ライプツヒ音楽學校の
教師となる
ローベルト・フランツの歌曲創作の頂點
(ハルレ)
グスタフ・マーラー生る(ボヘミアのカサ
シュト)

リスト：ワイマール退去、ローマへ移住
全ドイツ音楽協會第一回音楽祭(ワイマ
ール)
ドイツ歌手聯盟の創立
ワーグナーの「タンホイザー」初演(パリ)
ハインリヒ・マルシュナーの死
ロンドンにローヤル・アカデミー・オブ・

ミュージック創立

1862 ビスマルク：宰相に就任
ツルゲネフ：「父と子」(虚
無主義)
スエズ運河の開設

1863 ゴットフリード・ゼムベル
の建築様式に関する著
述
全ドイツ労働組合の創立

1864 第一回國際労働者聯盟の
創立(ロンドン)
シュレスウィヒ・ホルシュ
タインの戦
A.テニスンの「エノック・
アーデン」

1866 ドイツに於ける思辨的美
学の絶頂(ヘーゲル哲
学の影響)
イポリット・テーヌ著「藝
術哲学」

1866 獨逸戦争
ケーニヒスグレッツの戦
北ドイツ同盟
「造型美術雑誌」現る(ラ
イプツヒ)

リスト：聖エリザベート完成
リスト：娘ブランディエヌの死
ワーグナー：名歌手の詩完成、作曲開始
ブラームス：ワイマールに赴く
アントン・ルビンシュタイン：ペテルスブ
ルグ音楽學校創立

ベルリオーズの「トロヤ人」初演(パリ)
ブルックナー：交響曲試作開始
ヘルマン・フォン・ヘルムホルツ「音響感
覚論」を公刊

ワーグナー：バイエルン王 ルドウィッヒ
二世と最初に會ふ
マイヤーベールの死(パリ)
リヒャルト・シュトラウス生る(ミュンヘ
ン)
ペートヴェン全集の出版開始(67年まで)

リスト：ローマで僧職を授與さる
リストの「聖エリザベート」ベストで演奏
「トリスタンとイゾルデ」初演(ミュン
ヘン：ハンス・フォン・ビューロー指
揮)

リストの母死去す
リスト：ナポレオン三世に謁見を賜ふ
リストのオラトリオ「キリスト」完成(ロ
ーマ)
フランス歌劇當時「抒情劇」と呼ばる
イタリアでシューマン、リスト、ブラーム
ス知らる
ニコラウス・ルビンシュタインによりモス
カウ音楽學校創立

ハンス・フォン・ビューロー：ピアニストとして演奏旅行開始
 ユーリウス・ブリュートナー：ライブチッヒにピアノ工場建設
 ブラームスのピアノソナタ作品一番二番現る
 ヨアヒム：コンサート・マスターとしてハンノーヴァーへ
 ヴェルディ「トロバドール」(ローマ)と「ラ・トラヴィアタ」(ヴェニス)を以つて大成功を収む

1854 リスト：ピアノソナタ短調(ローベルト・シューマンに)
 リスト：交響詩「レ・プレリュード」(1845)「祝典樂」(1853)「オルフォイス」「マゼッパ」(1850)ワイマールで初演
 ワーグナー「ラインの黄金」の總譜完成
 ワーグナー：「ワルキューレ」に着手(56年まで)
 ワーグナー：ショーペンハウエルの哲學を知る
 ワーグナー：ロンドンへ旅行
 シューマン：自殺せんとす
 ライブチッヒのリーデルクランツ創立
 エドアルド・ハンスリックの著書「音樂美に就て」出版
 バハのマタイ受難樂：イギリスで初演(ベソネット指揮)
 ブラームスの最初のリート作品三番「愛の誠」現る

1855 ドイツ唯物主義の著述家 K. フォークト 及 ルド

ウィヒ・ビュッフナー
 オーストリアとの合併
 最初のバリー萬國博覽會
 近代ヨーロッパ大銀行の發展
 ロシアのアレキサンダー二世即位

1856 ドイツにサロン浪漫主義の詩人現る

1857

1858

1859 ドイツのシラー祭
 ダーウィンの著書「種の起源」

リスト：ファウスト交響樂完成
 リスト：グランのミサ曲
 ブルックナー：リンツの寺院オルガニストとなる
 ロンドンにクリスタル・パラスト演奏會開始(同地の音樂生活再興)

リスト：ダンテ交響樂完成
 リスト：彼の弟子カール・タウジヒの出現
 ローベルト・シューマンの死(ボン近郊, エンデニッヒ)
 ドイツに感傷的なサロンリート隆盛
 ストットガルト音樂學校創立
 ドイツのヘンデル協會創立

リストの九つの交響樂詩印刷さる
 ヨアヒム：リストの要求を拒絶
 ハンス・フォン・ビューローとコジマとの結婚
 ジョルジュ・ビゼー：ローマ賞獲得

リストの「理想」ベルリンで初演
 ワーグナー：ヴェニスに行く
 ベーター・コルネリウスの喜歌劇「バグダッドの理髮師」ワイマールで反對派に非難さる
 エドアルド・ラッセン：リストの引退に代つて宮廷樂長としてワイマールへ
 ベルリオーズ：歌劇「トラヤ人」を書く

ケーラー, ブレンデル, ボール等ライブチッヒに全ドイツ音樂協會創立(リストの監督の下に)

- 1847 クリノリーネ (硬布製の婦人の下袴) 數年前より流行 (約1860年頃まで)
- リスト: 名技的演奏生活の最後
ベルリンにシュテルン合唱團創立
ニューヨークに「ドイツ・リーダー・クラウン」創立
フェリックス・メンデルスゾーンの死 (ライプチヒ)
フリードリッヒ・フォン・フロトの「マルタ」初演(ウィーン)
- 1848 パリに二月革命
ルイ・フィリップ家の滅亡
ドイツの三月一揆
フランクフルト・アム・マインのパウル教會にドイツ國民大會
共産主義宣言
オーストリアにフランツ・ヨーゼフ皇帝 (1916年まで)
- リスト: 宮廷樂長としてワイマールに移る
ワイマール「新ドイツ派」の中心となる
プロシア政府: 公開の音樂實施狀況に関する記録を徵集
ワーグナー: 「ローエングリン」を完成
ワーグナー: ニーベルンゲンの詩作開始
ワーグナー: フォイエルバハの哲學を知る
シューマン: 歌劇「ゲノフェファ」及「マンフレッド」への音樂を完成
- 1849 ドレーズデンに五月一揆
オクスフォード運動の進展(カーディナル・ニューマン)
- リストの交響詩「タッソー」ワイマールのゲート祭に
ワーグナー: ドレーズデンより逃亡、チューリッヒへ(84年まで)
ワーグナー: 「藝術と革命」及「未來の藝術」を書く (50年まで)
フレデリック・ショパンの死(パリ)
ベンネット: ロンドンのバハ協會創立
オットー・ニコライの「ウィンゾルの愉快な女房達」初演(ベルリン)
ヨアヒム: コンサート・マスターとしてワイマールへ
フェルディナンド・ヒルラー: 市の音樂指

- 揮者としてケルンへ(84年まで)
- 1850 ハイน์リッヒ・ラウベ: ウィーンのブルグ劇場長となる(67年まで)
組合制度の形式
- リストの指揮の下に「ローエングリン」初演(ワイマール)
リストのショパンに関する著述
ハンス・フォン・ビューロー: チューリッヒでワーグナーの許に
ワーグナーの著書「歌劇と戯曲」(51年まで)及「音樂上のユダヤ教」を書く
ローベルト・シューマン: ドレーズデンで「ファウストの狀景」を完成し、デュッセルドルフ市の音樂指揮者となる
ライプチヒで彼の歌劇「ゲノフェファ」成功せず
デーモン: バハのブランデンブルグ協奏曲の總譜出版
ライプチヒにバハ協會創立
- 1851 ロンドンに最初の萬國博覽會
- シューマンの第三交響曲「ライン」初演(デュッセルドルフ)
ヴェルデイの「リゴレット」初演(ヴェニス)
エドアルド・グレル: ベルリンのジングアカデミーの指揮者となる
- 1852 ナポレオン三世フランス皇帝となる(70年まで)
ニュールンベルグにゲルマン博物館創立
- リスト指導のバレンシュテット音樂祭に「新ドイツ派」の最初の示現
リスト: 「未來音樂」の流行語
職業としての市設樂隊樂手(Stadt-pfeifer-tum)の最初
ワーグナー: ニーベルンゲンの詩完成
ワーグナー: マティルデ・ウェーゼンドンクと知り合ふ
シューマン: 彼の全集出版を開始
- 1853 アイゼナハの教會々議
- リストの山嶽交響樂初演(ワイマール)

1842 ケルンのドーム建築の再
開始

ザルツブルグのモーツァ
ルト記念碑除幕式
アメリカの短篇小説家エ
ドガー・アラン・ポー

リスト：北ドイツの諸市で大活躍（前年
の末より）特にベルリンに於ける大成
功

ワーグナー：パリより帰還
ドレーズデンで「リエンツィ」初演
ベルリンで王立楽団(Kgl. Kapelle)の交
響楽演奏會開始
マイヤーベール：ベルリンでゲネラル・
ムジーク・ディレクターとなる
モーリツ・ハウプトマン：トーマス教會
合唱長としてライブチッヒへ
ケルビーニの死(パリ)

ニューヨークにフィルハーモニック・ソサイ
ティイ創立（多年合衆國最高の演奏會事
務を爲す）

1843 パリーの第一回國際平和
會議

ベルリンの歌劇場火災
ルードウィッヒ・リヒター
の偉大なる木材彫刻の
時代

リスト：ロシア及ポーランド旅行
リスト：ミュンヒェンへの演奏旅行（歐洲
大旅行翌年まで）

ワーグナー：ドレーズデンの宮廷樂長と
なる

ワーグナー：「さまよへるオランダ人」の
初演

ワーグナー：同曲間もなく シュポーアの
指揮によりカツセルで

ワーグナー：「使徒の聖晚餐」初演(ドレ
ースデン)

シューマン：「天國とペリ」(ゲワントハウ
ス)

ローベルト・フランツのリート作品一番
現る

メンデルスゾーン：ライブチッヒ音樂學
校創立

ベルリンのドーム合唱團創立
ベルリオーツのドイツ旅行

1844 ベルリンの新歌劇場開設

リスト：ダグー伯爵夫人との別離
リスト：ハイネとの最後の破綻
リスト：パウリーヌとの再會(パリにて)
ロンドンで「ミュージカル・タイムス」發
刊

ベルリオーツの著書「管絃樂法」出版
メンデルスゾーン：ヴァイオリン協奏曲
を書く

シューマン：「ファウストの狀景」の作曲
開始

シューマン：ドレーズデンに行く
シューマン：彼の代りにフランツ・ブレン
デル「新音樂雜誌」の編輯となる

ヨゼフ・ヨアヒム：ライブチッヒのゲワ
ントハウスに初めて現る

ロルツィング：ライラチッヒの市立劇場
の樂長となる

ウィーン男聲合唱團創立

1845 アレキサンダー・フォン・
フムボルトの著書「コ
スモス」
フォイエルバハ「宗教の
本質」

リスト：ベートーヴェン記念碑除幕式列
席(ボン)
リストの交響詩「レ・プレリュード」の草案
ワーグナーの「タンホイザー」初演(ドレ
ースデン)

シューマンのピアノ協奏曲イ短調完成

1846 フィッシャーの美學(57年
まで)

ワーグナー：ドレーズデンで ベートー
ヴェンの第九交響曲演奏

ミュンヒェンにアカデミー・デル・トーン
クンスト創立

モシェレス：ライブチッヒ音樂學校教師と
なる

ルの最初の幼稚園
イギリスのヴィクトリア
女帝の即位 (1901年ま
で)

1838 ドイツ最初の國營鐵道
(ブラウンシュヴァイク
よりウォルフエンビュッ
テル)
ローベルト・ライニッ
クの詩
メリケの詩集

1839 アウグスト・コントの實
證主義哲學
バルザックの小説

生る
ベルリオーズの鎮魂曲初演(パリー)
ロルツィングの「皇帝と大工」初演(ライ
ブチッヒ)
ワーグナー：リガへ行く
ヨーハン・ネボムク・フムメルの死 (ワイ
マール)
ジルヘル「ローレライ」の作曲

リスト：ミラノの演奏會に活躍す
リスト：ヴェニスで演奏す
リスト：ウィーンの演奏會 (氾濫のため
に苦しむハンガリア人のために)
リスト：ダンテソナタ
ショパン：ジョルジュ・サンドとマジョルカ
へ
シューマン：ウィーンにてシューベルトの
ハ長調交響曲發見
ベルリオーズのベンベヌート・チェリーニ
初演(パリー)
ベルリオーズ：ジュールナール・デ・デバ
に音樂の論説を書く
ヨーゼフ・ヨアヒム：ウィーンにてヨゼフ
・ベームのヴァイオリンの弟子となる
ドイツのモーツァルト協會フランクフル
ト・アム・マインに創立

リスト：ダゲル伯爵夫人との息子ダニエ
ル生る
リスト：故國ハンガリアに於ける大歡迎
ワーグナー：パリーに到着
ショパンの二十四のプレリュード 作品二
十八番現はる
シューベルトのハ長調交響曲初演 (ゲワ

ントハウス)
ヴェルディの最初の歌劇「オベルト」初演
(ミラノ)

1840 フリードリッヒ・ウイヘルム
四世即位
畫家コルネリウスをベル
リンへ招聘
ドイツニ愛國主義隆盛
ニコラウス・ベッカー「自
由なるドイツラインの
歌」
シュネッケンブルゲルの
「ライン」の守り

1841 フリードリッヒ・ヘッペル
のゲノフェファ
ホフマン・フォン・ファレ
スレーベン：現在のド
イツ國歌の詩を作る
トーマス・カーライルの
「英雄崇拜論」

リスト：ベストに於ける大活躍
リスト：シューマンとドレーズデンで初
めて會ふ
リスト：ライプチッヒに於ける演奏
リスト：當代第一のピアニストとして認
めらる
リスト：パリーでワーグナーとの最初の
會見
リスト：ロンドンへの旅行
ドイツ音樂祭の隆昌
ニコロ・パガニーニの死
名技主義の頂點
ピアノのための淺薄なる音樂作曲の蔓延
(ヘルツ、ヒュッテン、テラー、マイヤ
ー、A. ドライショック)
アドルフ・サククス：サクソフォーン發明
ドニゼッティの「聯隊の娘」(パリー)

リスト：パリー音樂學校に於けるペー
ーヴェン演奏會(ベルリオーズ共演)
リスト：北ドイツ音樂協會の第三回音樂
祭に出演(ハムブルグ)
リスト：ノンネンウェルトの生活
リスト：ベルリンで最初の演奏會開催
フリードリッヒ・ウイヘルム四世の命
令でベルリンに古代劇上演
聯邦會議によりドイツの音樂上の著作權
保護(不許複製の禁)
ジョン・フライ：イギリスの學校唱歌の革
命を始む

- マの最初の戯曲と小説
シャミソの抒情詩
ファラデー：感應及磁電
を發見
- 「ドン・ファン」變奏曲作品二番につい
て)
ショパン：パリーに現る
シュポーア：ヴァイオリン教則本
エロールの「ザンバ」初演(パリー)
女流歌手、バスタ及グリシ
ハインリッヒ・マルシュナー 宮廷樂長とし
てハンノーヴァーへ
- 1832 ゲーテの「ファウスト」第
二部
ゲーテの死(ワイマール)
グスタフ・アドルフの聯
盟の創設(ライプチッ
ヒ)
ジョルジュ・サンドの小説
「レリア」(婦人解放)
- 1833 凡ての國に於いて ジャー
ナリズムの意義増大
デュツセルドルフの藝術
生活(イムメルマン、グ
ラッペの活動)
イギリスに所謂オクスフ
ォード運動開始
最初の電磁氣的電報
- 1834 「青年ドイツ黨」の文學團
體
- 「ドン・ファン」變奏曲作品二番につい
て)
ショパン：パリーに現る
シュポーア：ヴァイオリン教則本
エロールの「ザンバ」初演(パリー)
女流歌手、バスタ及グリシ
ハインリッヒ・マルシュナー 宮廷樂長とし
てハンノーヴァーへ
- ショパンの最初のマヅルカ作品六番現る
ドレスデンに於けるイタリア歌劇の解
體
新しきプロシアの儀式現れ、プロテスタ
ント禮拜の革命に道を開く
ロンドンに セークレッド・ハーモニー・ソ
サイエティ創立(オラトリオ、ミサ曲、
カンタータ)
- リストの山嶽交響樂の最初の草案(ヴィ
クトル・ユーゴーによる、49年完成)
フェティス：ブリュッセル音樂學校長とな
る
ヨハネス・ブラームス生る(5月7日・ハム
ブルグ)
ワーグナーの交響曲ハ長調初演(ゲワ
ントハウス)
ネーゲリ：バハの大ミサ曲中キリエとグ
ロリアを出版
メンデルスゾーン：市の音樂指揮者とし
てデュツセルドルフへ)
ショパンのノクターン作品九番印刷
- リスト：ジョルジュ・サンドに初めて會ふ
リスト：ダグー伯爵夫人との戀愛事件始

- 既成のものに對する鋭き
批評
ドイツ關稅同盟
ジョルジュ・サンド：「旅
行中よりの手紙」
- 1835 多くの娛樂雜誌ドイツに
現る
ドイツに於ける最初の鐵
道(フェルトよりニュ
ールンベルグ)
- 1836 ロシアの詩人プーシュキ
ン及ゴゴの抒情詩及短篇
小説
- 1837 マインツのガーデンベル
グ祭
フリードリッヒ・フレーベ
- る
ワーグナー：劇場の樂長としてマクデブ
ルグへ
ローベルト・シューマン：ライプチッヒで
「新音樂雜誌」創始、「メヴィッド」同盟
ガゼット・ミュージカル創設(パリー)
ロンドンのヘンデル祭(356人の歌手、222
人の演奏者)
- リスト：ダグー伯爵夫人とのスキス生活
リスト：娘ブランディーヌ誕生
フランスに男聲合唱團流布
古典主義的な弱々しき交響曲の出現、サ
ン・サーンス
室内樂作品の不振
メンデルスゾーン：ゲワントハウスの指
揮者となる
ミュルラー兄弟の絃樂四重奏團の旅行
(古典四重奏曲の演奏特にベートーヴェ
ン)
- リスト：パリーに於てタールベルグと競
演
ロシア國民音樂の強大
ワーグナーの「戀愛禁制」初演(マクデブ
ルグ)
ワーグナー：ケーニヒスベルクに行く
フランツ・ラハナー：ミュンヒェンの宮廷
樂長となる
グリンカの「皇帝へ捧げし生命」初演(ベ
テルスブルグ)
- リスト：ダグー伯爵夫人とのイタリア旅
行(39年まで)
リスト：ダグー伯爵夫人との次女コジマ

の汽車

- 舞曲作家ヨーハン・シュトラウス(父)の出現
 ショパンのロンド作品一番現る
 ブレスラウのジングアカデミー創立
 ボアエルデューの「白衣の婦人」初演(パリ)
- 1826 ミュンヒェン藝術派
 モヌメンタ・ゲルマニア
 エ・ヒストリカ開始
 アイヒェンドルフの詩
- 1827 フランスに於ける印刷物の自由
 ベスタロッチの死
 電流の強さに關するオームの法則
- 1828 ゲーテの「ファウスト」の初演(ブラウンシュヴィク)
- ドイツに於けるロッシェニ崇拜の頂點
 ウェーバーの死(7月5日・ロンドン)
 ウェーバーのオペロン初演(ロンドン)
 ベートーヴェンの第十交響曲への草案
 シューベルト「冬の旅」の作曲開始(28年完成)
 フリードリヒ・ジルベルの「ドイツ民謡集」第一輯現る
- リスト：父の死に遭ふ
 リスト：第三回目の英國旅行
 ベートーヴェンの死(3月26日・ウィーン)
 ゴットフリート・ウィルヘルム・フォンク：ライプチヒの一般音樂新聞の編輯者となる(音樂批評の衰微)
 ハーモニカ, 木琴, グラスハーモニカ, ギターの名手旅行
- リスト：パウリーヌとの戀愛事件
 フランツ・シューベルトの死(11月19日・ウィーン)
 バガニーニの歐洲旅行開始
 名技主義の意義増大
 シューマン：大學生としてライプチヒに九歳のクララ・ウィーク最初の出現
 フランスに於けるベートーヴェン崇拜
 オーベルの「ポルティチの啞娘」の初演(パリ)

持て囃されたる演奏家・フリードリヒ・カルクプレンナー(パリ)

- 1829 ヴィクトル・ユーゴー：フランス浪漫派の先頭に立つ
 畫家ドラクロア 及 ドラロッシュ
 政治及藝術に於けるユダヤ主義の出現(ハイネの影響)
- ベルリオーズ：幻想交響曲を書く(標題樂の發展に對して刺戟を與ふ)
 交響樂に於いて示導動機(固定觀念)發生
 中部ドイツに發生せる新浪漫主義の著しき進展
 ロッシェニ最初の歌劇「ウィリアム・テル」初演(パリ)
 ジギスムント・タールベルグの最初の成功
 ベートーヴェンの力強き影響
 ウィーンは音樂に於ける傳統的地位を失ふ
 メンデルスゾーンによるゼバスティアン・バハのマタイ受難樂の蘇生(ベルリンのジングアカデミー)
 バハ復興の最初
 オランダ音樂協會創立
 ライプチヒに「ドイツ音樂出版商聯盟」生る
- 1830 パリーの七月革命
 ベルギーの革命(その獨立宣言)
 ポーランドの革命戰爭
 最初の鐵道(リヴァープールよりマンチェスター)
- リスト：パリで七月革命に参加
 ローベルト・シューマン：ライプチヒにてフリードリヒ・ウィークのピアノの弟子となる, アベック變奏曲公表
 メンデルスゾーン：最初の六つの「無言歌」を書く
 ワグナー：トーマス學校の生徒となる
 ベルリオーズ：ローマ賞獲得
 アドルフ・ベルンハルト・マルクス：ベルリン大學に音樂の教授として就職
- 1831 アレキサンダー・デュー
 シューマンの最初の批評(ショパンの

- 1820 ドイツに自由主義普及
ベスタロッチ全集
ベルリン大學に於ける美
學に關する講義
アンペア：電氣力學發見
- 少年リスト：エーデンプルグ及プレスブ
ルグでの演奏に成功を収む
少年リスト：チェルニーに師事
スポンティエニ：宮廷樂長としてベルリ
ンへ
ライプチッヒの文筆家、ヨージン・フリー
ドリッヒ・ロホリッツ及ゴットフリード・
ウイヘルム・フィンク
モシュレス：ピアノ協奏曲ト短調
ペスタロッチの方法によるドイツ學校唱
歌教授の革命（ナトルプ、ヒーンチュ、
ハインロート）
- 1821 ギリシア自由戦争開始
メッテルニヒ：自由主義
及國民主義運動を鎮壓
す
ナポレオン・ボナパルト
の死去（セント・ヘレナ）
- マイニンゲンに宮廷樂團創設
ウィーン音樂學校開校
ウェーバーの「フライシュッツ」ベルリン
で初演
メンデルスゾーン：ワイマールのゲーテ
の所へ
シューベルトの「魔王」作品一番として出
版
ケルビーニ：パリー音樂學校々長となる
- 1822 ハイリッヒ・ハイネの最
初の詩
古代エジプトの象形文字
の翻譯
- リスト：ウィーンの國會の廣間で演奏す
ベートーヴェンの莊嚴ミサ曲完成
シューベルト：未成交響曲を書く
シュポーア：宮廷樂長としてカッセルへ
ロッシーニのウィーンに於ける大成功
セザール・フランク生る（リュティヒ）
ロンドンのローヤル・アカデミー・オブ・
ミュージック創立
- 1823 フランスに於けるサン・
シモン派（新社會主義）
アメリカのモンロー主義
- リスト：ウィーンの假裝舞踏會場で演奏
す（ベートーヴェンに會ふ）
リスト：ブダペストで演奏會を催す

リスト：パリー音樂學校を去る
ウェーバーの「オイリアンテ」初演（ウィ
ーン）
ヨージン・シュトラウス（父）ヴィオラ奏者
としてヨーゼフ・ランナー（1801年生）
の舞踏管絃樂團に参加
ウィーン圓舞曲の勝利開始

1824 バイロン卿の死
特に南ドイツに降神術隆
盛

リスト：パリー社交界の花形ピアニスト
となる
リスト：バエールの指導の下に作曲の勉
強に着手
リスト：ロンドン旅行
雑誌「チェチリア」の出現
ベルリン王立圖書館に音樂蒐集部附加さ
る
ストットガルトのリーデルクランツ創立
ロンドンに於ける「フライシュッツ」の成
功
ベートーヴェンの第九交響曲初演（ウィ
ーン）最後の五つの絃樂四重奏曲の時代
マルシュナー：ドレスデンの歌劇の音
樂指揮者となる
ショパン：ヨーゼフ・エルスナーに就き勉
強（ワルサウ）
アントン・ブルックナー生る（上オースト
リアのアンスフェルデン）

1825 ドイツ・ビーダーマイヤ
ー時代始まる
凡ゆる生活形式に質朴な
る氣樂なる市民性現は
る
スティエーザンソンの最初

リスト：「ドン・サンショ」の總譜完成
リスト：第二回目のロンドン滞在
リスト：「ドン・サンショ」の初演（パリ
王立音樂院）
ウィーンのケルントネル劇場に於けるガ
ルレンベルク伯の大バレエ

フランツ・リスト年表

- 1811 ゲーテ「詩と眞實」第一巻 フランツ・リスト:生る(10月22日・ハンガ
リアのライディング)
ウェーバーの喜歌劇「アブ・ハッサン」初演
(ミュンヘン)
プラーク音楽学校開校
- 1812 フランス軍ロシアに侵入 ウィーンに樂友協會創立
モスカウ及ベレシナに於 北ドイツ及南ドイツ(シュワーベン地方)
けるナポレオンの敗北 に音樂協會設立
ドイツに於けるユダヤ人 ジングアカデミー及リーダーターフェル
開放開始 出現
シュワーベンの詩人達 シュワーベンのリート隆盛
(ウーラント, メリケ, シュポーア:ウイン劇場の樂長となる(16
ユステヌス, ケルナー) 年まで)
ストットガルトに音樂學校創立(18年廢
校)
音樂物の質屋發生
モーツアルトの「ドン・ファン」イギリスで
初演
- 1813 ドイツの自由戦争 リヒャルト・ワーグナー:生る(5月22日・ラ
10月18日 ライプチヒの イプチヒ)
國民戦争 ギセッペ・ヴェルディー生る
ヴァイリアに於けるフラ ウェーバー:劇場の樂長としてプラーク
ンス軍に對するウェリ (16年まで)
ントンの勝利 ベートーヴェン:第七交響曲及「ウェリ
ントンの勝利」初演
ロンドンで フィルハーモニー・ソサイエ
ティの演奏會開始
ブリュッセル音樂學校創立

- 1814 ナポレオン:エルバ島に ベートーヴェン:「フィデリオ」(第三回の
流さる 改作)及第八交響曲初演
プロシアの師範學校に於ける音樂教育の
隆昌
- 1815 ナポレオンの百日天下 ヨーハン・ネボムク・メルツェル:「メトロ
ドイツ同盟(66年まで) ノーム」を作る
- 1816 ドイツ語學及古典學の隆 E.T.A. ホフマンの「ウンディーネ」初演
盛 (ベルリン, プラーク)
ウェーバー:樂長としてドレスデンへ
ロッシーニの「セヴィラの理髮師」初演(ロ
ーマ, 此の時がイタリヤ歌劇にチェム
バロを用ひた最後)
シューベルト:「魔王」を書く
ケルビーニの鎮魂曲ハ短調現る
- 1817 ワルトブルグ祭 ピアノ演奏法に於ける「ブリランツ」(燦
ドイツ, プルシェンシャフ 爛たる演奏法)の發生
ト(學生組合) ヨーハン・ネボムク・フムメルのピアノ作
バイロン卿:マンフレッド 品の時代
トーマス・ムーア:ララ・
ルーク
- 1818 汽船の最初の大西洋横斷 ベートーヴェン:莊嚴ミサ曲に着手
H. クラウレンの浮薄な ドイツ學生歌集出版
る娛樂小説 デュッセルドルフに於ける最初の下ライ
ヘーゲル:ベルリンに於 ン地方音樂祭
いて講義開始
ショーペンハウエル:「意
志と表象としての世界」
- 1819 印刷及教授の自由に對し ウェーバー:「舞踏への勧誘」
て壓迫されたるカール シューベルト:「鱒」五重奏曲
スバードの決議 フムメル:ワイマールの宮廷樂長となる

サルヴェ・レデナ
ミサ曲
鎮魂曲

II. 聲楽曲

a) オラトリオ

聖エリザベートの物語
キリスト
聖スタニスラウス(未完成)

b) ミサ曲とプサルム

四部のミサ曲 1848
グランの祝典ミサ曲 1855
合唱ミサ曲 1859
ハンガリア戴冠式ミサ曲 1866
鎮魂曲 1867
オルガンのためのミサ曲 1878
プサルム 13番, 18番, 23番, 161番

B. 文筆類

I. 全集

第一卷 フレデリック・ショパン
第二卷 論説及旅行記
第三卷 演劇論
a) 音楽劇作品に関する論説
b) リヒャルト・ワーグナー
第四卷 「アンナーレ・デス・フォルツェリット」より
第五卷 雑録 批評 論戦及時代
史的論説
第六卷 ハンガリアに於けるジ

129番, 137番

c) 管絃楽伴奏附聲楽

藝術家に寄す

ストラスブルグ大伽藍の鐘
プロメトイスへの合唱曲
聖フランツィスカの太陽讃歌
ワイマール民謡

d) ピアノ伴奏の聲楽曲

歌曲集 (57)

火刑に處されたるオルレアンの乙女
マールリンクの鐘
ペトラルカの三つの小歌
三人のジプシー
父達の墓
ワルトブルグの歌

プシーとその音楽

II. 書翰

第一、二卷 1821—1886の手紙
第三卷 アグネス・ストリート・
クリンワースへの手紙
第四、五、六、七、卷 ウィットゲン
シュタイン侯爵夫人への手紙
第八卷 第一、二卷への附加
ワーグナーとリストとの書簡交
換

リストとハンス・フン・ビューロ
ーとの書簡交換
リストとカール・アレキサンダ
ー大公との書簡交換
カール・ギルレへのリストの手

紙

カール・ゴットシュラクへの手

紙

アントン・アウグスト男爵への

手紙

フランツ・リストの作品

A. 最も重要な創作

I. 器楽曲

a) 管絃樂

交響詩(13)

山嶽交響樂, タッソー, レ・プレリュ
ード, オルフォイス, プロメトイ
ス, マゼッパ, 祝典樂, ヘロイド・
フネーブル, ハンガリア, ハムレッ
ト, 異教徒の戦, 理想, 搖籃より
墓場まで

交響樂 (2)

ダンテ交響樂, ファウスト交響樂
レナウの ファウストよりの二つの
挿話, 夜の行列, 村の居酒屋の踊
(第一メフィストワルツ)

行進曲

ゲーテ祝典行進曲, 誓忠行進曲,
岸より海まで, ハンガリア祝典行
進曲, ハンガリア暴風行進曲, ビュ
ーロー行進曲

b) 管絃樂附ピアノ曲

協奏曲 (2)

第一番變ホ長調, 第二番イ長調
死の踊り(ダンス・マカーブル),
「怒りの日」の編曲

c) ピアノ曲

練習曲(12)

パガニーニのカプリスによる大練
習曲, 演奏會用練習曲 (3)
(變イ長調, ヘ短調, 變ニ長調)

協奏練習曲 (2)

(森の叫び, 侏儒の圓舞)

旅人のアルバム

巡禮の曆 (三卷)

大協奏獨奏曲(悲愴協奏曲)

ヘ短調ソナタ

物語曲(鳥の説法, 波上のフランツ・
フォン・パウラ)

バラッド (2)

詩と宗教の調和(1-10)

妖怪 (1-3)

愛の夢 (1-3)

慰安 (1-6)

カプリス・ワルツ (3)

メフィスト・ワルツ (1-4)

ポロネーズ (1-3)

半音階的ガロップ

ハンガリア狂詩曲 (1-20)

d) オルガン曲

B.A.C.H. に基くプレリュードとフー
ゲ

昭和十五年十一月十七日印
昭和十五年十一月二十日發行

フランツ・リスト傳

定價二圓八十錢 (停)

譯者 高野 劉

發行者 河出 孝雄

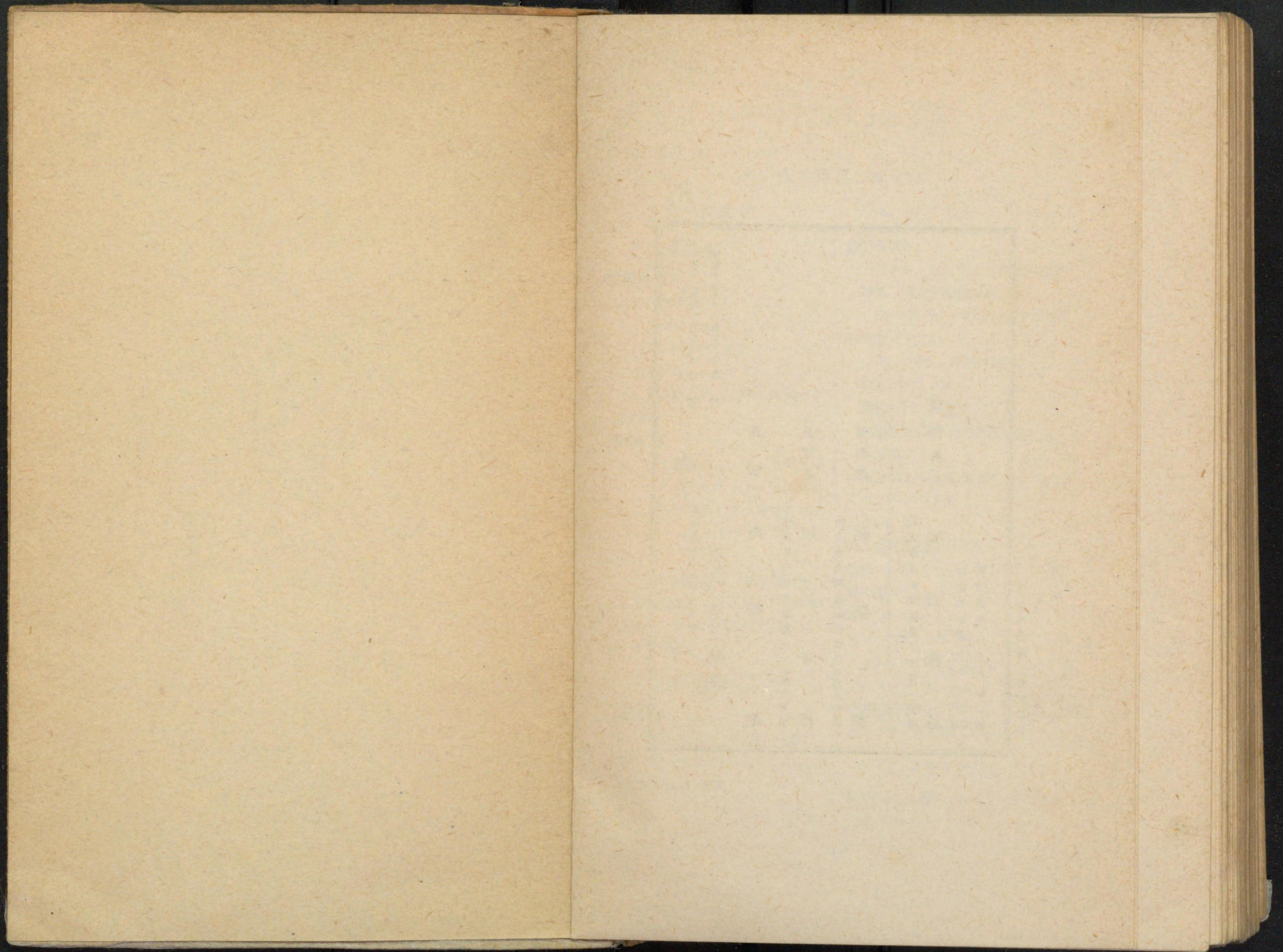
印刷者 高橋 郁

發行所

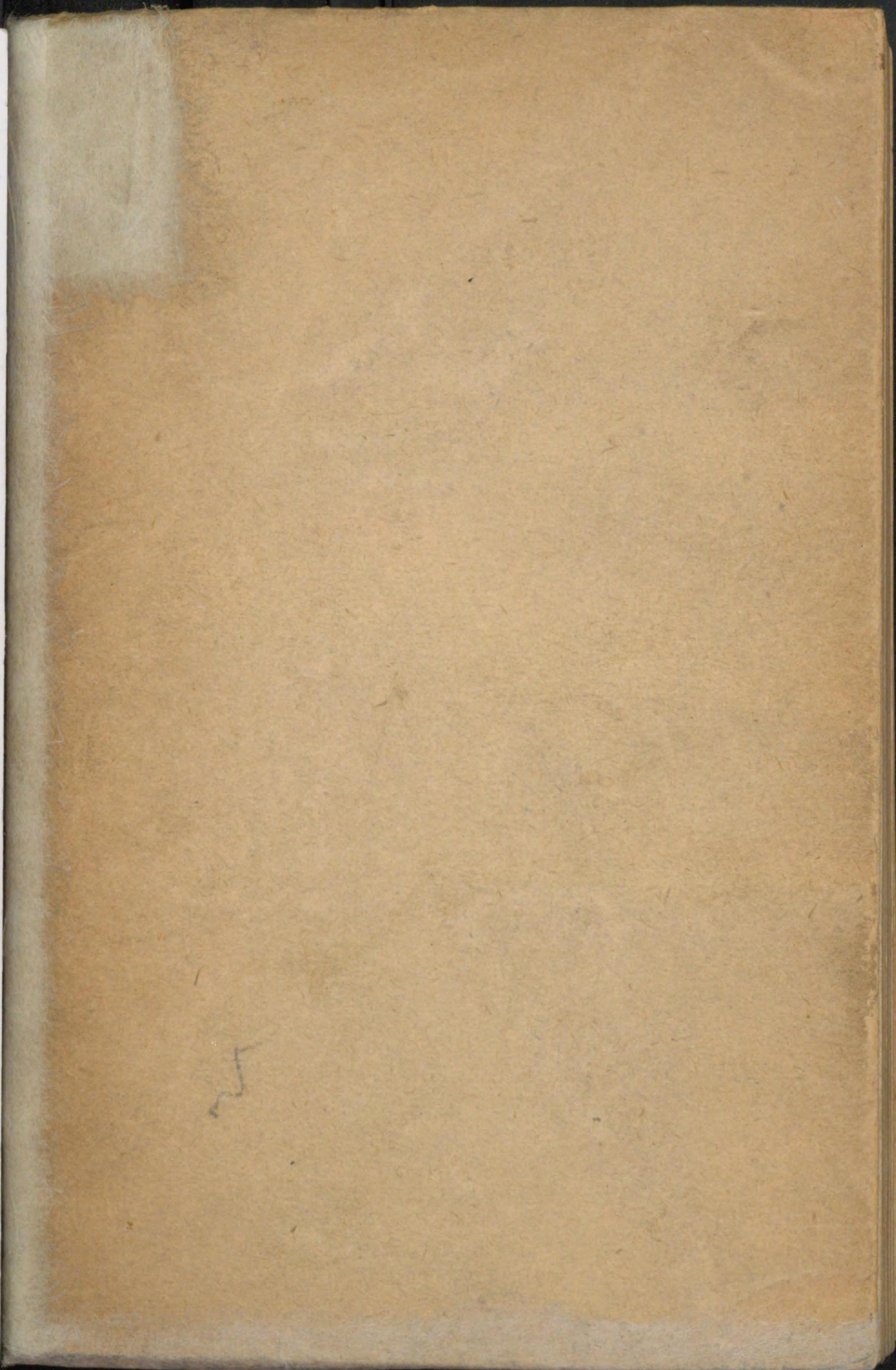
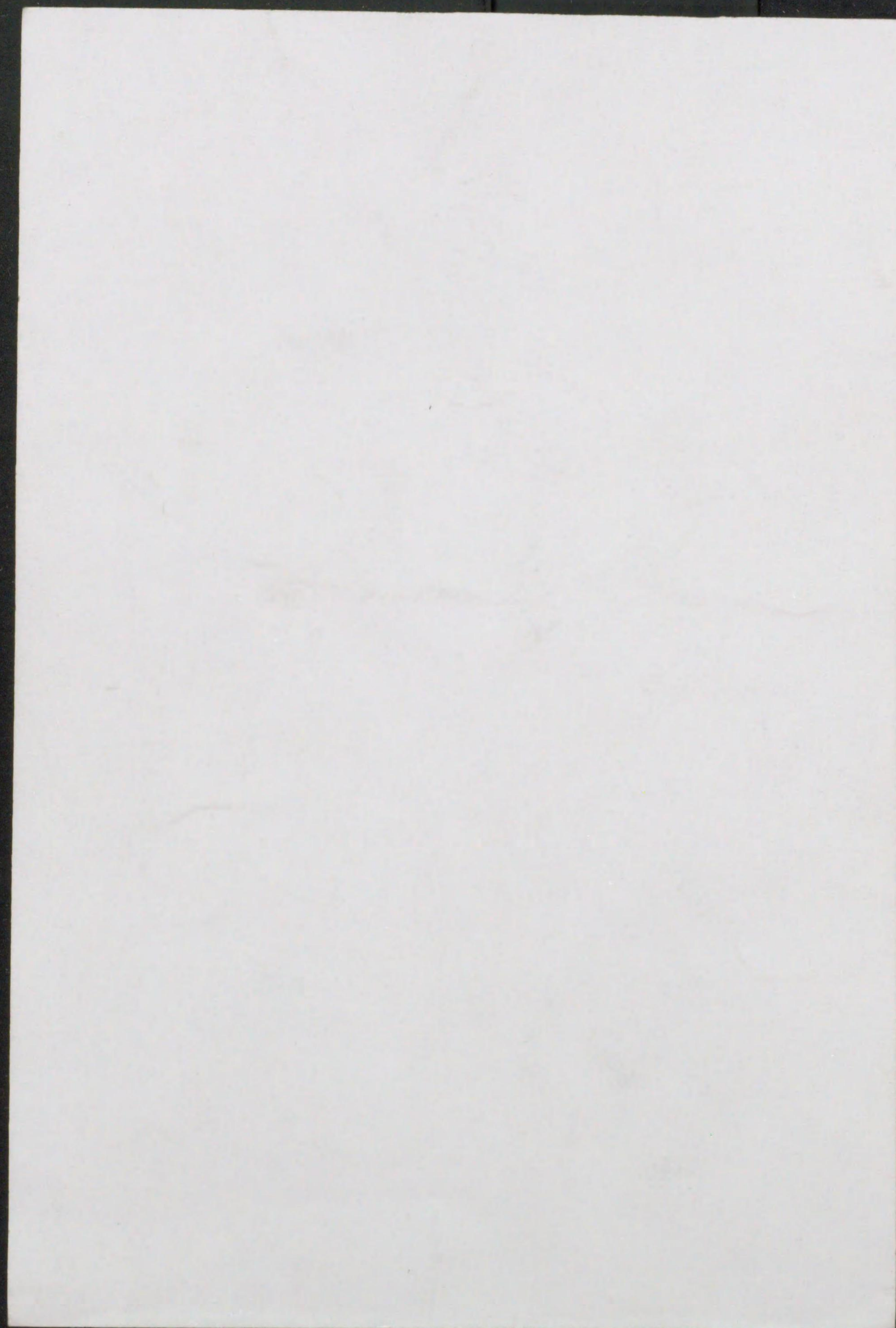
東京市日本橋區通三丁目一番地
河出書房

電話 日本橋 二一七七
振替東京 一〇八〇二番

三協印刷株式會社印刷



773
156

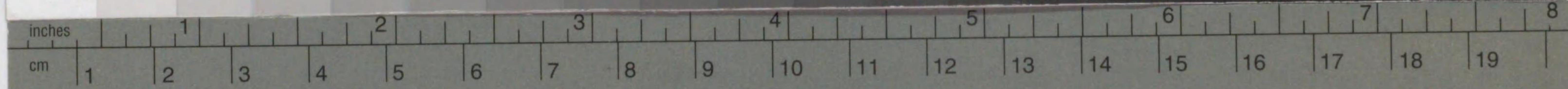


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

